SOCIUS No.13 2018

［ソシアス］仁愛女子短期大学　地域活動実践センター

INDEX

1. はじめに
地域との「共感」…… 大西　新吾　1

2. 公開講座・講習会
・生活とデザインセミナー
「あなたの知らない和紙の世界。」…… 杉原　吉直　2
・幼児教育学科公開講座
「生命のケハイ」…… 田島　征三　6
・保育者ワークショップ
「保育のユニバーサルデザイン① 情報共有のための観察と記録の視点」…… 中尾　繁史　14
「保育のユニバーサルデザイン② 外国籍の子どもや保護者は何に困っているのか」… 増田　翼　16
・Microsoft Excel講座・Microsoft Word講座 …… 平塚紘一郎　18
・孫育て講座
「折り紙であそぼう！」…… 松川　恵子　19
・公開講座
「プレゼンテーションのコツを学ぼう」…… 澤崎　敏文　20
「演歌で学ぶ音楽の世界」…… 大久保功治　21
「恋する山川登美子」…… 前田　敬子　22
「歌う金子みすゞ」…… 前田　敬子　24
・新人保育者スキルアップ講座／幼教卒業生OGのつどい …… 幼児教育学科　26

3. 森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携事業報告 … 地域活動実践センター　27

4. 自治体等との連携事業（福井市・永平寺町）
・もりた夢駅～冬物語 …… 内山　秀樹　28
・もりのわフェスタ …… 内山　秀樹　29
・「ふるマイスター」のエプロン・三角巾をデザイン。 …… 西畑　敏秀　30
・リサイクル戦隊「ワケルンジャー」のポーズ考案。 …… 西畑　敏秀　31
・ふく^2 ベジ・ファースト応援事業 …… 牧野みゆき　32
・ベジ・ファースト＆元気体操21 啓発のための動画作成 …… 澤崎　敏文　33
・永平寺町との包括連携事業 …… 地域活動実践センター　34

5. 福井しあわせ元気大会・全国障害者スポーツ大会サポートボランティア　学生部学生生活課　35

6. 多文化体験プログラム
「英語であそぼう！」…… 野本　尚美　39

7. 図書館企画展示の活動報告 …… 竹下　真弓　42

8. 子ども家庭センター
・平成30年度報告 AOSSA子ども家庭センター　子育て支援室　相談室 … 野路　昌美　44

9. 学生の社会的活動報告
・森田地区活性化プロジェクト …… 48
・坂井市まちづくり協議会オリジナルキャラクターデザイン2018 …… 48
・「ＳＮＳ映え講座」で講師体験 …… 49
・福井から世界とつながるワークショップ …… 49
・栄養研究サークル活動報告 …… 50
・じんあいこどものくに …… 50
・すてきなおねえさんのたのしい童謡とわらべうた ～手遊びとともに～ …… 51

10. 学生ボランティア活動報告
・英語サークル（森田地区児童館における英語教室） …… 52
・パソコンボランティアサークル …… 52
・折り紙サークル …… 53

11. 管理栄養士国家試験対策リカレント講座 …… 54
12. 平成30年度 公開講座開講一覧 …… 55
13. 教員の地域活動一覧 …… 58
14. 平成30年度 教員免許状更新講習 …… 60

※敬称略

はじめに

地域との「共感」

地域活動実践センター長　大西　新吾

平成 30（2018）年 5 月 15 日、永平寺町と仁愛女子短期大学は「包括的連携に関する協定」を締結しました。自治体等との連携協定は、平成 22（2010）年に森田地区まちづくり協議会とのあいだで、また平成 27（2015）年に福井市とのあいだで締結したのにつづき、3 例目となります。協定の目的は「永平寺町の地域資源を活用し、綿密な相互連携のもと、仁愛女子短期大学の専門知識・研究機能を地域の課題解決に活かし、活力ある地域社会を実現するため」（協定書より抜粋）となっています。そしてこの目的を達するために、これから「地域社会の活性化及びそれに資する人材の育成」・「地域文化に即したまちづくりへの情報収集と発信」・「食を通した健康づくりの支援」・「質の高い幼児の教育・保育環境の整備と子育て支援」等に関して、連携し協力して取り組むことになりました。（今年度の具体的活動内容は別のページで後述します。）

ここから話は変わります。平成 5（1993）年にサッカーの J リーグが開幕しました。これにより、プロスポーツとしてのサッカーが日本で認知され、多くの子供たちのあいだにもサッカーが普及していきました。この J リーグには他のプロスポーツにはない一つの特徴がありました。それは大企業等のスポンサーが前面に立たず、チーム名にも企業名が入っていないということです。開幕して数年はサッカーファンが急増し、スタンドにも多くのサポーターが詰めかけて満席に近い状態が続きましたが、やがて少しずつスタンドにも空席が目立つようになり、チームによってはスタンド席がスカスカの状態となっていったそうです。このときに、やはり大企業のスポンサーの強い支援がないと運営は無理だという声が出始めたそうです。その時、この困難な状況に立ち上がったのが、サポーターでもある地元の人たちでした。J リーグの各チームは地元のものであり、地元そのものであり、チームが活性化することは地元が活性化することでもあると。チームを救える最後の砦は大企業ではなく地元・地域のサポーターたちであると……。こうしてチームと地元サポーターの方たちがともに困難に立ち向かいながら再び J リーグは活気を取り戻し、今日に至っています。そこにはきっと両者のあいだに生まれた「共感」という目には見えないパワーがあったと思われます。

いま日本は人口減少社会に突入しています。地方は人口減による税収減のため、本来なら行うべき必要な施策に取り組めず、国（という大きなスポンサー）からの支援に頼らざるを得ないような状況に陥っているとの報道を見聞したりします。また、人が少なくなるとこれまではできたことができなくなり不便なことが出てくるので、その不便さを補い、より便利になるために、AI やロボットを活用しようとしています。「幸せ」のとらえ方は人それぞれ（相対的）で「便利さ」も幸せのひとつかもしれませんが、まわりのみんなが支え合って得られる「共感」も幸せのひとつに入るかもしれません。仁愛女子短期大学は地域の皆様とともに「共感」し響き合えるような実践的な活動を目指してまいります。

生活とデザインセミナー
「あなたの知らない和紙の世界。」

講師：和紙ソムリエ／和紙キュレーター　杉原　吉直

告知フライヤー

2018年5月4日、岡太（おかもと）神社1300年大祭が厳かに、かつ盛大に執り行なわれた。この神社は、和紙の女神を祀る日本で唯一の神社である。
また、和紙は、再生力と1000年の保存性があり、人と地球に優しい素材である。
その理由と越前和紙の歴史を、明治4年創業の杉原商店10代目の杉原吉直氏にお話していただきました。
その一部をご紹介。

岡太神社　1300年大祭　2018.5.4

岡太神社　式年大祭（33年に一度）

紙は神様に通じる

神社の神主が使用の幣（ぬさ）は、昔は麻の紐であったが、現在は和紙である。
この幣を振ると神が山から降りてこられる。

今から1500年ほど前に、美しいお姫様が現れ、当時貧しかった村人に紙漉きを伝え発展をもたらしたという言い伝えがあり、その「川上御前」を紙祖神として祀るため岡太神社が建てられた。

岡太神社は「延喜式神名帳」（926年）という書物に記載されていることからも歴史を感じることができる。

岡太（おかもと）神社

昔の紙は、麻の着物や魚を獲る網が古くなり使用できなくなったものを水に溶かし、漉いて紙にしていた。紙漉きは、中国から仏教とともに日本に伝えられ、工場が610年ごろできた。
その後、日本は独自に楮（こうぞ）・三椏（みつまた）・雁皮（がんぴ）を用いた製造に切り替えた。その理由としては、山野に材料があり、木の成長が早く、手に入れやすかったためである。

世界最古の2200年前の中国の紙

福井は中国大陸に近く、都にも近い

当時は三国から武生・大虫まで船で行くことができ栄えていた。当時の運搬は船が中心だったため、先の琵琶湖を通り京都・奈良にも通じていた。大陸に近く都に近いという地理的立地条件が揃った地域であった。

さらに、世界で一番古い印刷物（版画）は「百万塔」に納められた「陀羅尼（だらに）」で770年頃のものである。この「百万塔」に収めるために全国に紙漉きが広まり、現在も各地に紙の産地が残っている。

越前奉書紙は武家社会の公文書用紙（オフィシャルドキュメント）のことで、現在の和紙の里に紙座があり、三田村家が天下一と殿様からのお墨付きをもらって印を押すことを許され、他の産地と区別していた。

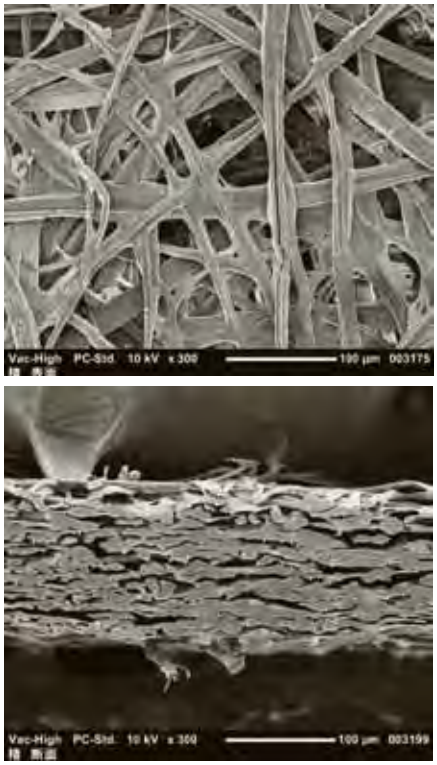
三田村家の現在の頭首は39代目、40代目も紙漉きを行なっている。

織田信長から賜ったお墨付き朱印

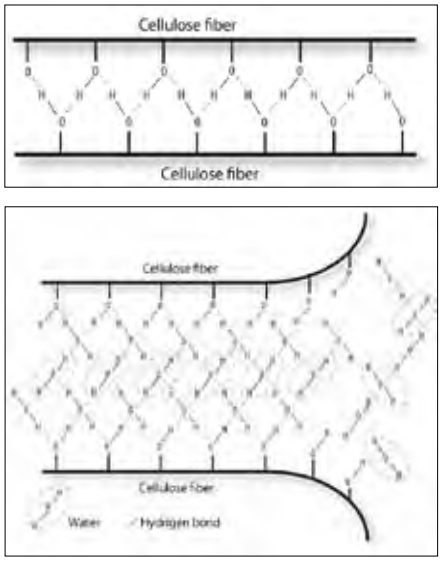
雁皮を用いた紙を越前鳥の子紙と称し、紙の王と賞賛された。
藩札（日本で一番古いお札）を出すことを最初に許されたのも越前で、職人たちの日々の研究開発・努力の賜物であり、越前で漉けない紙は無いとまで言われた高水準の産地である。

和紙は水素結合

和紙の繊維は長いため、丈夫で強い紙になる。また、空気の層や穴が多く断熱効果が高く、呼吸している。電気的水素結合で繊維同士がくっついているため、水で結合力を調整可能となり、魚拓、拓本などに利用できるのである。



和紙の電子顕微鏡写真
（上：表面・下：断面）

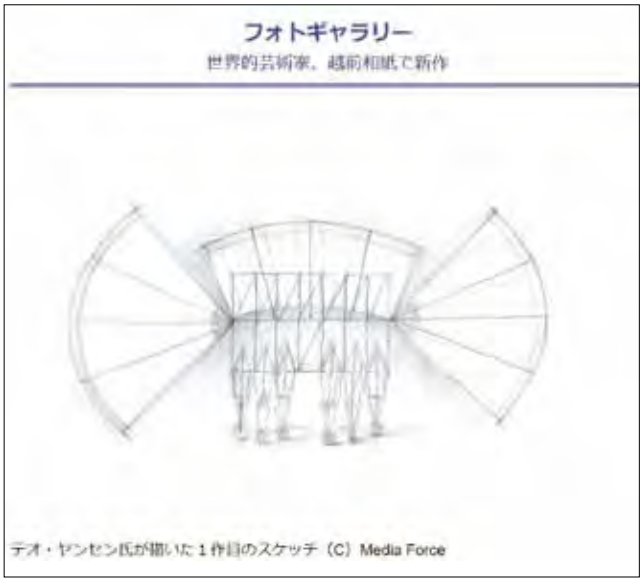


和紙の水素結合図
（上：乾燥後・下：繊維が漂っている）

テオ・ヤンセン展

2019年9月開催の国際工芸展（仮）のメイン企画としてサンドーム福井のイベントホールにて開催予定。
テオ・ヤンセン氏のスケッチをもとに、杉原氏が越前和紙とのコーデネートを行なっていて、日本の伝統工芸とヤンセン氏のコラボレーションは世界初となる。

THEO JANSENは、1948年オランダ生まれで、デルフト工科大学を卒業。
オランダの彫刻家（キネティック・アーティスト）であり物理学者でもある。
風を受けて生物のような歩行をする作品「ストランドビースト」新作の羽部分を越前和紙で製作し、展示および実際に動かすデモンストレーションを実施、その他の従来作品も展示予定。



Japanese Echizen Paper

2015年レンブラントの版画に使用されている用紙の成分が、日本の越前和紙の成分の一部と一致したとレンブラントミュージアム（アムステルダム）が発表。越前和紙の実力を歴史が証明しているかのようだ。

杉原氏は、現在も内外の多くのアーティストに特注の越前和紙を提供し続けている。さらに建築資材として多くの建物に採用されている。

レンブラントミュージーアム 2015年5月

武田双雲氏へ提供

隈研吾 神宮前の家プロジェクト

レストランRAKU（キャンベラ）2018年

六本木 けやき坂 グランドハイアットホテル

2月16日／会場の様子
皆さん真剣な
まなざしでした！

杉原　吉直
Yoshinao Sugihara

杉原商店代表/ 和紙ソムリエ·和紙キュレーター
1962年　福井県越前市不老町生まれ
1986年　小津産業（株）（創業350周年の和紙問屋）入社
1988年　（株）杉原商店入社
1993年　インクジェットプリンター対応和紙「羽二重紙」 開発
2000年　「漆和紙（うるわし）」がDESIGN WAVE FUKUI大賞を受賞
2002年　IPEC2002に出展し「奨励賞」を受賞（東京ビックサイト）
2004年　パリ国際展示会「Salon du Meuble de Paris 2004」に出展
2008年　フランクフルト·アンビエンテ出展（ドイツ） 以後ミラノ、リヨン、ロンドン等で展示会開催
2011年　高島屋180周年ディスプレイに採用され、NHK WORLD-englishにて世界放送される
2013年　Jorg Gessner氏との提案がGUERLAIN（フランス·パリ）のショーウインドウディスプレイに採用される
2013年　橋田規子氏デザインの「ちぎり和紙」がかわいい感性デザイン賞優秀賞受賞（日本感性工学会）
2015年　黒透かしのような「DECO-WASHI」の開発に取り組み、『デザインの引き出し』に取り上げられる
2016年　サザンオールスターズの限定DVDにオリジナル葡萄柄の和紙を作成。第1回 三井ゴールデン匠賞を受賞

幼児教育学科公開講座

生　命　の　ケ　ハ　イ

平成30年11月17日（土）　13:30～15:00

絵本作家　田島　征三 先生

1. 感じる

こんにちは。いつも話をする前にプロフィールを紹介してもらうんだけれど、なんか今日はすごく良かったね。感動しちゃったね。なんかすごい人がこれからしゃべるんだな…と。（会場爆笑）（注２）

最初から絵本を読みましょうか。（会場拍手）すばらしいご紹介をしてもらったので、心構えができてないんだけど。

今年は２冊新しい本を出しました。１冊も出さない年もあるので、２冊出すのは滅多にないことです。先ほど紹介された新潟の廃校（注３）の校庭に隣接して、池があるんだけれど、環境がいいものだから、たくさんの生き物が生息して、絶滅危惧種も居ます。

『ぼくおたまじゃくし』（朗読）

これは僕の少年時代を書いた『絵の中のぼくの村』というエッセイ集（注４）にも出ているんですけど、小学校に入る一年前に洗面器の中でおたまじゃくしを飼っていたんですね。そしたらみんな蛙になって出ていったのに一匹だけ残っているやつがいる。よく見るとひげが生えている。「なまず」でした。それを外のつるべ井戸の横にかめがあって、それに入れて飼っていたんです。結構大きくなりました。そしたら雨がものすごく降った夜があって、朝起きてみたら、水があふれちゃって、なまずがいない。多分水と一緒に庭を横切って川に向かって泳いでいったのではないのか。それが、未だに、僕の心の中で、なまずが一生懸命川に向かって泳いでいくんですね（注５）。

そのなまずが、絵本に登場した。絵本を創るときというのは、いろんな生き物たちをスケッチしたり落書きしたりしているんだけど、おたまじゃくしを主人公にしようと思って、以前飼っていたなまずにたどりついて、それが絵本に結びついた。

プロフィール

1940年　大阪府生まれ。幼少期を高知県で過ごす。

1962年　多摩美術大学の在学中、手刷『しばてん』を制作。

1965年　処女作『ふるやのもり』（福音館書店）

1969年　東京都下日の出村でヤギを飼い、畑を耕し、創作活動。第２回世界絵本原画展〈金のりんご賞〉受賞。

1974年　講談社出版文化賞受賞。

1988年　絵本にっぽん賞、ボローニア国際児童図書展〈グラフィック賞推薦〉受賞。

1990年　小学館絵画賞、年間イラストレーション作家賞受賞。

1998年　廃棄物処分場からの焼却灰の飛散により胃癌、伊豆半島に移住。 絵本『ガオ』を創る。

2009年　新潟県十日町市の廃校を丸ごと絵本にした「空間絵本-学校はカラッポにならない」を制作。

2013年　香川県大島、ハンセン病の収容所の島で、入所者が暮らしていた建物を「青空水族館」にし、その後『森の小径』を制作中。

2018年　国際アンデルセン賞国内賞受賞（注１）伊藤忠商事のイラストレーションを担当。日経広告大賞、ADC賞（アートディレクタークラブ賞）をダブル受賞

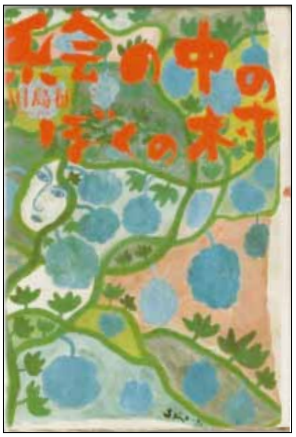
2019年　「瀬戸内国際芸術祭」で大島に新作「Nさんの人生絵巻」を制作。夏の部に発表予定。

田島征三
『ぼく、おたまじゃくし？』
（校成出版社）

この話は「自立」の話なのね。でも「自立の話」と最初から決めつけて創り始めると、説教くさい絵本になってしまう。絵のすばらしさや物語の面白さの中から、子どもたちや大人が自然と感じてくれないとね。周りには勉強のできる子がいる、足の速い子がいる。自分ができない子に思えている子がいっぱいいると思う。発達障害と言われている子もいる。その子たちは、今はそうでも将来のことはわからない。今、逆上がりも出来ない子が体操の選手になってオリンピックで金メダルとか得るかもしれない。子どもたちは未来のことは何もわからない。みんな不安の中で、生きている。

実は、双子の兄弟の征彦と一緒に知恵遅れって言われたのね、子どものとき戦争中で、僕たちは腸炎になった。だから、赤ん坊なのに栄養摂取できなくて、栄養失調になった。すると、脳の発達も遅れて、特に小脳の発達が遅れて、いろんなことができなくて、周りの悪たれたちにいつもいじめられていた。僕の方は、癇癪もちで殴られても殴り返すので（注6）、余計やられていた。征彦の方は泣きっぱなしで、しかも泣き声が人と違うのです、「お～いよいよい、お～いよいよい」と泣くんです。（会場爆笑）だから教室に居ると、校庭のセンダンの木の方から「お～いよいよい」と聞こえて「また、ゆきちゃん、いじめられてる」と行くと、3人くらいの上級生が蹴ったり叩いたりしている。「おまんら、何してるがぜよ～」と僕も飛び込んで行くと、僕も一緒にいじめられる。（会場笑い）

特に校長が僕たちをいじめたんです。戦争が終わったばかりの頃で、民主教育も始まったばっかり。母親は小学校の先生をしていて、同じ学校の先生、日教組という教員組合の文化部長か何かでした。校長は右翼だったので、母親は対立して追い出されてしまったんです。僕たちは母親の身代わりとして、いじめられたんでしょうね。全校生徒が50人くらいしかいなくて、校長先生も授業していたんです。僕たちも校長室に大きな石を放り込んだりして抵抗していたんですけど、そのために「鏡川学園に入れるぞ」とよく言われたので、僕はそこが少年院か鑑別所のようなところだと勝手に想像していたのだけど、後でわかったことには、知恵遅れの子の学校だったのですね。



田島征三
『絵の中のぼくの村』
（くもん出版）

田島征彦・田島征三
『ふたりはふたご』
（くもん出版）

僕は今でも知的障害の方たちとの付き合いがあります。滋賀県の日本で一番古い、知的障がい者の成年の生活寮と作業所を兼ねたところに入り浸っていたので（注7）、作業主任が「せいちゃんちょっと用事があるから門の横で待っててよ」と言うので、そこで立っていると、婦人団体のおばさんたちが見学にきてぞろぞろ通る。その中の一人が走ってきて、僕に「あなた年いくつ?」なんて聞く。なんで、僕に年を聞くのか、知的障がい者と間違えているんだね。結局、向こうも気がつくんです。気がついたときに、態度が急に変わる。知的障がい者と間違われるのはかまわないが、その時の態度の変わり方がイヤな感じだね。（会場笑い）

「絵本と木の実の美術館」が一冊の写真集として、2015年にできました。兵庫県出身のデザイナー、北川一成（注8）という世界的に活躍している人で、とんでもないことをする人なので、絶対この人に頼もうと思って頼んだのですが、その人も知的障がい者だと思われていたみたいで、子どもの頃に「また、イッセーがアホなことしよる」と言われていたみたい。

ある時、虹が出ていた。一成さんは虹をつかまえようと、ポンコツの自転車を一生懸命こいでいた。周りのみんなは「虹なんかつかまるわけないじゃないか、やめとけ」と言っている。後ろから一成さんのお母さんが血相変えて走ってきた。「イッセー、これに虹入れてこい」と言って、レジ袋を手渡してくれたんだね。いいお母さんだね。（注９）一成さんは自分が何になるかはわかっていなかったけれど、お母さんは、この人はちゃんとした、すごい大人になれるんだと信じていたということですね。（注10）

『ぼく、おたまじゃくし？』は、誰かが信じてくれている、誰かが守ってくれていると、人は劣等感に打ち勝つ力を持てるんじゃないか描いた絵本ですね。でも、こうして解説したら、どうしようもないね。絵本を読んで、「ああ、そういうことか」と読んだ人が自分で感じないとね。

2. 知る

もう一冊、今年描いたのは、『わたしの森に』。アーサー・ビナードというアメリカ人の詩人が1990年に日本にやってきて、日本語で詩を書いて『釣り上げては』という詩集でなんと、中原中也賞もらっているんですね。人間としても非常におもしろい人です。今年2018年「大地の芸術祭」（注11）でアーサー・ビナードとコラボレーションをしたんです。テーマは「マムシ」。この村にマムシがいっぱいいるんです。そのマムシをテーマにして何か創れないかということで、巨大なマムシを創ったんです。その過程で、制作中に絵本も創ることになりました。

アーサー・ビナードが文を書いて、僕は絵を描きました。アーサー・ビナードは日本の古典文学「枕草子」のようなものを創れないかと言ったんです。マムシに清少納言になってもらおうということです。「枕草子」は春から始まるけれど、これは冬から始まります。

アーサー・ビナード文　田島征三絵
『わたしの森に』
（くもん出版）

『わたしの森に』（ページを繰りながら一部朗読）

新潟の十日町の山奥の「鉢（はち）」集落の雪は湿っていて重いんです。絵本では雪が解け始めても、絵本には雪景色が続いていて、なかなかマムシが出てきません。マムシが出てくると絵本買ってくれないのではないかと思ってね。（会場笑い）

マムシのここ、目と鼻の間にピット器官というのがあって、これは赤外線を感知して、真っ暗でもわかるんだそうです。知らなかったでしょ？（会場うなずく）マムシは、暗闇の中で獲物にかみつく、それを一旦口から放す、マムシには強い毒があるから、即死する。毒が全身に回ると、筋肉がやわらかくなり、肉もおいしくなるのではないか、それを僕は勝手に「料理する能力がある」と思っている。

それから、マムシは、遅延受精ができるんです。いい男がいたら、とりあえず交尾しておく、精子を蓄えておける。適当なときがきたら卵子と結合させる。人間もそれができればね…。マムシには5年も経ってから生まれる場合もある。だいたい3年間は蓄えておけるんです。また、マムシは胎生なのです。普通の爬虫類は卵ですから、孵ったときに親はいないし他の動物に食べられる。餌を捕る力も無いので餓え死にしてしまって、ほとんどが育たないのですが、マムシの場合には育つのです。

マムシが読んで、喜ぶような絵本を描こうと思ったのです。マムシは読まないけれどもね。（会場笑い）

僕は高知のド田舎で育ったから、マムシはたくさんいた。都会から、ご主人が戦死して、子どもが三人いる、ひ弱な女性が移り住んできた。とても一人では生きていけないように思えていた人が、マムシをつかまえて食べて、そして、子どもも育て、百姓もやってがんばった。また、「絵本と木の実の美術館」のある、鉢（はち）という集落でも、二十歳まで生きられないと言われていた男性が、マムシを捕まえては食べていたので、村で一番元気な人になった。未だに食べているんですね。また、焼酎に付けておいて飲むと体にいいですね。アーサーと僕は、去年の冬、マムシ酒を飲みながら対談をした。

ただね、僕もむやみにマムシを殺しているんです。役に立つように殺すのなら、まだ許されるけれども、「わあ、マムシだ」とやみくもに殺している。そういう殺し方をしたっていうことは、未だに慚愧の念に堪えない。マムシのことを知ると、赤外線探知ができたり遅延受精ができたり、すばらしい能力を持っているとわかるのに。相手のことを知ると、気持ちは違ってくるのに。それはそれで大事だと思う。

今、ヨーロッパでイラクとかシリアとか逃げてくる人たちいますよね。死に物狂いで逃げてくる。でも、肌の色が違うとか言葉が違うとかいうことで、排除する。命からがら逃げてきても、またそこで迫害される。今アメリカがメキシコ国境でもそういうことやってますね。日本でどうなのかというと、日本でも在日の人たちを未だに差別している。関東大震災のとき、今から95年前ですが、そのとき大人だった人はもう亡くなっていますが、朝鮮人が暴動を起こすのではないか、井戸に毒を流すのではないかというデマが流されたんです。本当にひどい地震ですから、人はみな心が動揺している、それで、そのデマに乗って、朝鮮人だと見たら石を投げつけて殺したんです。千人以上の朝鮮人が殺されました。これは自警団が殺したのではなく、一般の普通に生活している人が殺したのです。そうしてみると、相手のことを知らな

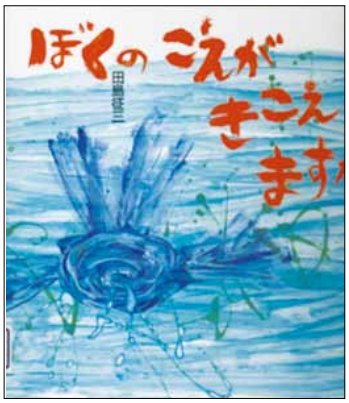
い、そして不安があると、人間というのは錯乱状態の中ですごい恐ろしいことをしてしまうものなんですね。残念ですね。それは今から95年前の話ではありますけれど、60数年前、第二次世界大戦のときにも中国大陸や朝鮮半島でいろんなことが起こっている。そして今もヨーロッパやアメリカでそういうことがある。日本でも差別はいっぱい残っている。

3. つながる　～絵本の可能性～

人間の本質というのは、本当は優しい。相手のことをちゃんと理解できるはずの人たちが豹変していくのは、すごい残念です。

今から10年くらい前、日本と中国と韓国、絵本作家が集まって、平和絵本を創ろうというプロジェクトが立ち上がったんです。ぼくは、日本では売れてないんだけど、中国と韓国では、結構売れる、もててるよ。知らないでしょ。（会場爆笑）ぼくらは、是非一緒にやろうよって手紙を出して、日本からぼくたち4人の絵本作家が行って話をしました。すると、「私たちはやりたい。でも、周りが

反対する。日本人とやってろくなことないって言われた」と。「日本人て嘘つきじゃないか」と。確かに今も、徴用工の問題、戦争中に炭鉱の危ない仕事を韓国や中国の人を拉致するように無理に連れて来て働かせ、逃げ帰る人を殺したりしたことの、裁判が行われ判決がでた。相手の側は、怒りを感じている。日本はお金で解決して終わりと思っていても、拉致され殺された相手側の怒りに終わりはない。そのことを日本人は知る必要がある。僕は5歳の子どもだったけれども、子どもだったから知らないでは済まされないのではない。韓国や中国の人にもわかってほしい。最後は泣きながら訴えました。



田島征三
『ぼくのこえがきこえますか』
（童心社）

「一緒に絵本を創ろう。そうしたら、お互いの気持ちがわかるよ」と。最後には抱き合ってわかりあえました。それで、日本の絵本作家4人、韓国も4人、8人で南京に行きました。そして南京で中国の4人の作家と話をして、絵本作りが始まったのです。

ところが、日本の絵本作家の浜田桂子さんの『へいわってどんなこと？』（注12）という絵本の中に原爆を感じさせるようなシーンが出て来くるのだけれど、それを目にした中国と韓国の人が、「被害者意識丸出しじゃないか」と怒り出したのです。僕は原爆が許せないです、絶対に忘れない、いつまでも深く胸に刻んで、世界中に訴えて続けていかないといけないと思っています。けれども、それを前面に出すということは、中国や韓国の人から見るとどうなのか。「あなたたちも私たちにとんでもないことをしてきたのに、あなたたちは原爆のことばかり言う。その被害者意識丸出しの姿勢は違うんじゃないのか」と当然思うでしょう。それがすべて正しいとは言わないけれど、そこに思い至る、配慮できる絵本でないといけない…と、いろんな葛藤を経て絵本ができました。

過去でなく、今もここで、戦争が起こるかもしれない、それを止めないといけません。少し話が飛びますが、ちゃんとつながりますよ。ダルトン・トランボという人が、『ジョニーは戦場に行った』という映画をつくった。この戦争は第一次世界大戦。戦争で主人公は、生きる肉塊となります。最終場面で彼の姿が暗い闇の中に消えていく、胸が引き裂かれるような救いようのない戦争映画です。ダルトン・トランボは、その思想のために国外追放されてしまいますが、その後も偽名をつかって脚本を書いたのです。それが『ローマの休日』です。この映画でも、王女が最後に後ろ姿を見せて消えていきます。前作と同じように、この先、不条理な世界で生きていく王女を表しているようです。様々な紆余曲折を経て生まれた、日中韓の平和絵本が『ぼくのこえがきこえますか』です。（朗読）

絵本で戦争がとらえられるのか、という疑問がありますけれど、強いメッセージ性を伝えるのに有効かなという思いもあります。確かに（「ジョニーは戦場に行った」の映画のような）映像の方が強いです。歌の方が強いです。絵本は動かない、単に一冊の本だけれど、これで反戦の気持ちを伝えること、人の残酷さ、人の切なさ、人の哀しみを伝えることができなくはないのではないかと考えていますアートの力に期待している（注13）。

リアルな絵ではなくて、抽象と半具象、抽象の絵は（たとえば、これなどは）一見すると「ぞうさんかな？」と思うかもしれませんが。絵本は絵と言葉でできているので「かあさんの　かなしみがみえる　どんな　いかりよりも　つよく　ふかい　かなしみ。」という三行の言葉と、この抽象

画で伝わるものはかなり有効ではないかと思っています。むしろわかりやすい絵では伝わらないのです。他にも「おとうとの　いかりが　みえる。ゆきばもなく　どろどろとうずまく　いかり」のページも完全な抽象画です。

見えない感情を見えるようにするのは、やはり抽象画しかない。シュールレアリスム（超現実派）（注14）という方法があります。けれどシュールレアリスムで伝えられることは、限度・限界があると思います。すばらしい画家もいますけれども。今、複雑になった現代社会で、抽象画は非常に有効だと思っています。

それから『花ばぁば』という絵本（注15）は従軍慰安婦を描いた絵本なのだけれど、それが韓国で出され、中国でも出された。しかし、この本を出す約束をした童心社に「こんな本は出さないことに決定しました」と言われました。激しくやり合ったのですが、もう決まったものは変わりません。政府や右翼を怖がって出さないから、真実を知らせないから、戦争が起こったのではないのかと、他の出版社を探しました。先も言ったように、韓国からは「日本人は信用ならない」と思われているわけですから…。そして、ただ一人でやっている小さな出版社（ころから）から、今年（2018年）4月にようやく出せました。

クォン・ユンドク
『花ばぁば』
（ころから）

けれども、つい先ほども、こちらの福井県立図書館や短大の図書館に問い合わせてもらいましたが、この本は置かれていません。実は、僕は調べてもらう前から知っていました。図書館は日本に4000ほどあるのですが、『花ばぁば』は、そのうちの100の図書館でしか入れていないのです。図書館に入れる本を検討する組織が、「この本は推薦しない」と決めたからです。これはひどい。このように、現代日本にもまだ差別や偏見は残っているのです。けれども、韓国の作者の方は、日本で絵本が出たということをとても喜びました。

4. 創る　～生命のケハイ～

「絵本と木の実の美術館」の写真で、来年（2019年）のカレンダーを、ジーンズ屋さんが創ってくれたのでお見せします。今年は空間絵本の内部は触らずに、外にオブジェを創りました。

一般に、美術館というのは生き物を拒否するところ、昆虫を目のかたきにするところなのです。どういうことかというと、現代美術館、すばらしくきれいな美術館の前に水面があって、水面に美術品を写すと美しい仕掛けになっている。僕もそういうところで木のオブジェの展覧会をさせてもらったことがありますが、そのとき、オブジェをしつらえるためにスタッフが足を水に入れていると、足がみるみる赤くなってくる。強アルカリの水だからです。トンボが一生懸命卵を産んでも、卵は即死。小鳥も水を飲むんですよ、必死で。強アルカリにするのはアオミドロの発生を抑えるためだけれど、果たして、生き物を殺して、それが美しいか。僕は、生き物がいる美術館、床の下にイタチが巣を作っているような、「生き物のケハイ」がする美術館こそが本物の美術館だと思うんですね。（注16）僕の美術館の小川もアオミドロができる。でもそれをドジョウや魚が水と空気をかきまぜてくれて発生をおさえてくれる。魚、鳥、蛙、蛇、狸、アナグマ、イタチが居て、その頂点が鷹、その鷹が毎日来ていたのに、ある日その鷹が殺された。イタチの頭を切り、血を吸い、狸が肉を食べた。残酷だけれど、命はそうしてつながっていく。この写真は、鷹の魂を木のオブジェにして大空に吊るしたもの。「絵本と木の実の美術館」は、流木のオブジェが多くて、絵は子どもがウミサキ先生を黒板に描いた絵だけ。これは、子ども達3人の姿をオブジェにしたもの。もうみんな大人に成長しました。これは、マムシの大きなトンネル。雪が多くて重いところなので、「早く壊せ」と集落の人は言うんです。雪の重みで飛び散るんですね。それで1週間前に全部壊しました。トンネルの中では、アーサー・ビナードが創って自分で歌っている「マムシ小唄」が流れるているんです。「マムシ♪おそろしい♪」っていう感じの歌です。

新潟の鉢集落の「絵本と木の実の美術館」にもいらしてください。「いりやま」という地名があって、野菜を

作っているおばあちゃんたち、入山（いりやま）シスターズがおもてなしをします。この入山シスターズは『花ばぁば』の著者（クォン・ユンドクさん）に「おめでとう、日本で出版出来てよかったね」と伝えました。著者は泣きました。というのは、ちょうど元慰安婦の方々と入山シスターズは同じような年齢なんですよね。国同士のこれまでの複雑な経緯を乗り超えて、個々の同じ人間としてつながり合って、仲良くやっていけばいいではないかと感じられたからです。アメリカで、黒人が白人にリンチされたことで、黒人が暴動を起こしたとき、たくさん人が殺されたけれど、「仲良くしようよ、許し合おうよ」とリンチされた本人がメッセージを出したんですね。そこに共感が集まりました。人間は、その気持ちがあれば、仲良くしていくことができるのです。

（注1）国際アンデルセン賞は、2018年の角野栄子氏の作家賞受賞により、日本における歴代受賞は計５人となった。作家賞は歴代3人になったが、画家賞は依然として2人（赤羽末吉、安野光雅）。

（注2）「（受賞歴等の紹介に続けて）ところで、私にとりまして先生の作品との出会いは、この『しばてん』の絵本でした。絵も文も田島先生です。絵の広がりと奥行き、自由闊達で力強く生き生きとした感じ、何よりここに込められた人間洞察の深さに心から感動したものです。しかも、この作品は、先生が美術大学の在学中に、手刷りで創作したものとお伺いしました。とても驚きました。それ以来、数々の作品を読ませていただきましたが、「なんで、こんなにも、田島先生の作品に惹かれるんだろうか」と立ち止まってみると、田島先生の絵や絵本には共通して、人間の…というか、生き物の、寂しさとか、悔しさ、残念さというものが含まれているように思います。それが、いつしか勇気に変わる。そこに、大人はもちろん、子どもにも伝わりやすい形（筆者注：受け手側が身の丈に合っただけを自由に摂取できる仕方）で、命の深さ、広さ、重さ、尊さを語りかける哲学が秘められているように思えるのです。」と訥々と前田がご紹介したことを指す。「感動しちゃったね」とは会場の緊張を和らげるための先生の一級のユーモアだが、この時点でご講演内容を詳しく知らない紹介者（前田）が、ご講演後半の「絵本で戦争がとらえられるのか、という疑問がありますけれど、強いメッセージ性を伝えるのに有効かなという思いもあります。確かに、映像の方が強いです。歌の方が強いです。絵本は動かない、単に一冊の本だけれど、これで反戦の気持ちを伝えること、人の残酷さ、人の切なさ、人の哀しみを伝えることができなくはないのではないかと…」の伏線を張ったようになった。

（注3）新潟県十日町市真田甲2310-1『鉢&田島征三絵本と木の実の美術館』のこと。廃校となった小学校を利用して創った「空間絵本」美術館。この他、香川県大島には『森の小径』がある。

（注4）エッセイ集『絵の中のぼくの村』（1992年　くもん出版）には、双子のご兄弟、田島征彦先生と高知県で過ごされた少年時代の思い出が綴られている。同題で、東陽一監督が映画化し、第46回ベルリン映画祭で銀熊賞受賞。その映画には、征三先生と征彦先生も出演されている。また、絵本『ふたりはふたご』（1996年　くもん出版）は、征三先生の油彩と征彦先生の型染の手法を融合したもの。共に絵本作家であるお二人が各々の手法で自身の姿を描き、性質の違いもさりげなく巧みに表現されている。

（注5）映画でも、夜の雨の中を移動するなまずが描かれている。なお、『あめがふるふる』（2017年　フレーベル館）の表紙などにも、それらしき姿が描かれている。

（注6）このユーモアは、エッセイ集『人生のお汁』（2002年　偕成社）の「罵詈雑言」のエピソードを彷彿とさせる。また、同書「酒盗とままかり」には「怒りをエネルギーに転化させることで、創作活動をつづけてきたように思う。」とある。

(注7)この施設の利用者たちとの交流はエッセイ集『ふしぎのアーティストたち―信楽青年寮の人たちがくれたもの』(1992年旬報告社)に書かれている。

(注8)北川　一成　グラフィックデザイナー・アートディレクター。GRAPH取締役社長

(注9)このように子どもを理解する母親像は、映画『絵の中のぼくの村』の征三の母にも共通する。いたずらを村人たちから咎められた双子の兄弟に向かって「気持ちよかったじゃろうね」と母親が目を細める場面がある。ご講演後の質疑応答で「先生は双子のご兄弟ですが、お母さまはどのようにお二人に接していらしたか」との質問の際に「佐野洋子さんがお母さんのことを『しずこさん』というエッセイにまとめていますが、僕もいつか書きたいと思っている」とお答えになった。『絵の中のぼくの村』(1992年　くもん出版)の「母のこと」に「大人になってぼくがいつか立派な絵かきになれたなら、美しい母の姿をすばらしい絵に描こう。そしてその絵を世界中の人々に見てもらい、そして母に贈ろう。そうすればきっと母は今の哀しみを忘れるほど喜んでくれるに違いない」とある。

(注10)田島征三先生ご自身が、子どもの感性を信頼していることは、「子どもはいずれ大人になる。子どものころに好きだった絵本を大人になってから見て、『なんだ。こんなチャチな子どもだましだったのか』とがっかりさせたくない。大人になってから見ても『こんなすごい芸術作品だったのか』と驚かせるような絵本しか、存在する意味はないと思う。絵本はアート作品であるべきなのだ。そういう意味では、ぼくは大人に向けて絵本を描いている。ただ、それは子どもを無視しているということではない。すぐれた感性をもつ大人がおもしろいと思うものは、子どもだっておもしろがるのである。」等に表れている。(エッセイ集『人生のお汁』(2002年　偕成社))

(注11)2009年第4回「大地の芸術祭」。このとき、2005年に約130年の歴史をもちながら廃校となった旧真田小学校を舞台に、空間絵本『絵本と木の実の美術館』を開いた。

(注12)浜田桂子『へいわってどんなこと?』(2011年　童心社)

(注13)元来、絵や言葉の表現は、俳優や背景が実写される映画やメロディーで印象付けられる歌と比較して、数段「抽象」表現であろう。その上、「抽象画」で表現された哀しみや怒りは、他ジャンルと比較しても、万人に伝わりやすく、国境や個々の立場の壁を軽々と超えていく、特有の可能性をもつのかもしれない。「命の深さ、広さ、重さ、尊さを語りかける哲学が秘められている」作品の魅力(注2)は、多くのファンを魅了してやまないものであり、その魅力が平和絵本を引き寄せたのかもしれない。

(注14)フランスの詩人アンドレ・ブルトンが提唱した思想活動。一般的には芸術の形態、主張の一つとして理解されている。日本語で「超現実主義」と訳されている。

(注15)クォン・ユンドク(翻訳:桑畑優香)『花ばぁば』(2018年　ころから)

(注16)この姿勢は一貫している。題名もそのままの『いのちを描く』(1991年　童心社)のエッセイ集の他、エッセイ集『人生のお汁』の「『グリグリグリッ』の思想」に「グリグリグリッは〝命のひびき〟そのものだった。あの振動のなかに、命のすべてがあった。(中略)渡り鳥のなかにも、畑の野菜のなかにも、同じものがあった。もちろん、ぼくたち人間のなかにも。この〝命のひびき〟を描くために、ぼくは絵描きをつづけてきたのかもしれない。だが、グリグリを表現しようとして筆をにぎっても、それでは絵にはならない。ぼくの身体のなかにしみこんでいるものが、知らぬまにしみ出してくるのだ。」とあり、終始一貫している。

(文責　前田敬子)

保育者ワークショップ

【 保育のユニバーサルデザイン① 】

情報共有のための観察と記録の視点

幼児教育学科　講師　中尾　繁史

【講座趣旨】

気がかりな子どもや発達のゆっくりな子どものことを、保護者や同僚と共有したいのにうまく説明できない…なんてことはありませんか。普段の子どもの様子を上手にわかりやすく伝えるために、どのように記録を書くとわかりやすく整理できるのか、「観察のための視点」と「記録のための視点」を保育現場での経験を振り返ってまとめましょう。

【開催期日・場所】

平成 30 年 9 月 22 日（土）10：00 ～ 12：00
仁愛女子短期大学 E208
参加者：11 名

【講座内容】

保育者は子どもたちと関わる中で、保護者に伝えたい、同僚と共有したいと思う場面に日々出会っていると思います。しかし、刻々と時間が過ぎ、次々とやるべきことが迫り、気がつけば 1 日が終わっているという経験は誰でも持っていると思います。時間を巻き戻すことは出来ませんし、同じ状況を再現したくても叶いません。そのため、効率的に記憶を整理し記録として残すためにも、どのような視点で子どもを観察し記録をするのかを理解しておくことは保育者にとって有益だと考えます。

このようなテーマのワークショップが企画され、一定の参加者が集まることからも、日々子どもたちと関わりながら安定して観察を行い、正確な記録を行うことの難しさを保育者が認識していると伺えます。保育者が 1 人でクラスを担当する場合、活動全体を統制しながら観察をしなければなりません。ここに本質的な難しさがあります。観察者が活動に参加する参与観察においては、活動のコントロールに使うリソースと、活動を観察・記録するリソースは二律背反の関係にあります。観察の正確性を確保するためには視点がぶれず、目的の観察領域に的を絞って観察することが重要となります。

この講座では、観察の際の注目すべき視点として、観察対象となる子どもの①身体的側面 (身体の向きや動き、緊張 or リラックスなど)、②対人関係面 (保育者と子ども、子ども同士)、③物との関係、④遊びや活動の始まりや変化、集結の仕方などを参加者同士で確認しました。さらに、対象の子どもの発達段階に合わせて保育者が観察すべき内容も変化するため、5 歳児の遊び場面での行動についてビデオ教材を元に模擬記録を行いました。

【参加者所感】

- 記録をとることの必要性や重要性、また観点を学ぶことができ、園に戻って職員に知らせる事ができると思う。DVD を観ながら実際に自分が記録をとってみる実習をしたところ、あまりにも記録がとれていないことが分かり、正直なところ情けなく感じた。
- 日々の保育の中で、実習生がしているように、現場で働く保育士もメモなどを持ち歩き、子どもの言動の記録をとり、一日のある場面を振り返り、しっかり記録に残し、それをもとに職員間で共有し合う訓練も大事かなと思った。
- 日頃、気になっていたことが少し理解できたように思う。なかなか園に持ち帰り統一したりするのは難しいが、参考にしていきたいと思った。
- 記録の書き方がどうやったら上手くまとまるかなど分からなかったが、他の人の記録を見て意見交換したり、レジュメに記録のいろいろな書き方が載っていて、こんな書き方もあるのだと勉強になった。こういう風に記録の書き方を学ばせていただいて、少しスッキリした。少しずつうまく書けるようになれたらいいなと思う。
- 記録を取ることは、子どもの姿や成長、自分の保育が見えてくる大切なものだという事は理解しているつもりだが、日々の保育に追われて、なかなかじっくり記録に時間がとれないのが現状。今日学んだ、見るポイント、また、様々な記録の取り方を参考にしながら、短い時間で他人に伝わる記録が書けるよう努めたいと思う。
- 現場では、記録は欠かせないもので、またそれを職員同士共有させることが子どもの成長につながることは分かっているが、実践が難しい。今日の研修の中で、まず、子どもの行動の捉え方（書き方）それを職員同士が共有（伝える）できるポイントをいただけた。記録を通して、もっと子どもの姿を語りあって、よい保育士となるよう進めていけたらと感じた。
- 記録は非常に手間がかかり面倒な作業ではありますが、これを簡潔で手軽なものに変えていくには、日頃から①原因、②行動、③結果のポイントで観察し、記録をとりながら日々の訓練により自分の頭と体に叩き込んでいくしかないのだと感じた。園での共通書式（ポイント）を共有し、子どもの理解に努めたいと思う（ここがモヤモヤ…なのかなと思う）。

- 改めて、観察と記録は難しいなと感じた。ただ、どういった所をポイントとして見たらよいかと、日頃からのその子の特性も踏まえて観察したらよいという事が分かった。毎日の子ども達の様子から原因・行動・結果を考え、自分自身の経験を重ねていかないといけないなと思った。
- 日々行っている記録が、自分の苦手な事の一つであったので、今日の講座に参加して少し学べたかなと思う。今日学んだことを少しでもこれからに活かしていきたいと思う。でもやはり難しいことだなと改めて感じた。
- 記録を取ることは大切な事だと理解はしているものの、いざ実行しようと思うと、難しく他の先生との共有も個々の思い・感じ方・考え方があり、なかなかできずにいたような気がする。今後、どのように進めていこうか…と考えていく中での大きな後押しをしていただいたと思っている。

【まとめ】

保育者の観察と記録の質が高まることは、保育の質の向上と同義であると考えます。しかし保育者間での共有が物理的に難しいなど、組織や制度上の問題も同時に解決する必要があります。地域の保育事業や幼児教育事業を担う保育所、幼稚園、認定こども園、行政と連携しながら、今後も保育の質の向上に資するワークショップを企画したいと思います。

保育者ワークショップ

【 保育のユニバーサルデザイン② 】

外国籍の子どもや保護者は何に困っているのか

幼児教育学科　准教授　増田　翼

【講座趣旨】

福井県内外国人住民数の増加に伴い、県内各地域の園において、外国籍の子どもや保護者にどのような支援をすればよいかが課題になりつつあります。そこで今回は、入園手続きや日々の保育における対応の仕方、園全体での異文化理解の促進など、具体的事例も交えながら、多文化共生社会において求められる保育者の専門性と役割について考えてみましょう。

【開催期日・場所】

平成 30 年 11 月 3 日（土）10：00 ～ 12：00

【講座内容】

1．はじめに

もしもあなたの園に、外国籍の子どもやその保護者、あるいは帰国子女の子どもが通うようになったら、どのような課題を抱えることになるでしょうか。本講座では、食文化、言葉、保護者との連絡手段、という三つのテーマから考えてみました。

2．食文化

自分とは異なる文化に出会ったとき、子どもは様々な反応を示します。そのなかでも、特に拒絶反応を示しやすいのが（異文化に合わせることに困難性を伴うのが）食生活といえるでしょう。味やにおいに子どもたちは敏感に反応しますし、普段見慣れない食材などはなかなか口にしないものです。さらに、宗教等の理由から特定の食材を口にできない場合もあり、保育者側の異文化理解（広い視点）が求められる時代になりつつあります。

たとえば、福井県庁国際経済課が公表している「外国人住民数調査表」（2017.12 現在）によれば、県内にも中東諸国をはじめ、マレーシアやインドネシアといったイスラム圏出身者が数多く生活していることが分かります。周知のように、イスラム教では聖典クルアーンの記述において豚は不浄の生き物とされるため、豚肉や豚肉由来の加工食品等を口にすることができません。そのため、イスラム教家庭の子どもが在園する場合、その子が口にするものについて保育者間で話し合うことが必要（「ハラール認証」といったことへの理解も必要）となってきます。

そもそも、世界の国や地域には独自の食文化が無数に存在するということを保育者がしっかりと理解していなければ、外国籍の子どもが持参したお弁当の中身をめぐって子どもたちに偏った情報を伝えてしまう恐れもあります。

3．言葉

保育をするうえで、外国籍の子どもと保育者、あるいは子ども同士の間でトラブルになりやすいのが言葉の問題です。特に様々な背景や事情により日本語に親しみがない子どもにとって園生活は困難の連続となります。「どうして誰もぼくのことを分かってくれないの？」「多分、みんなはわたしのこと嫌いなんだ」「もしぼくが、お家の言葉を喋ったらみんなは笑うに決まってる」「みんなとお話ししたいけど、どうやって？」。このような気持ちを抱えている外国籍の子どもに対して、どのように接したらよいでしょうか。これは難しい問題です。その子のルーツである言葉（母語）を保育者が話せれば良いかもしれませんが、様々な言語に対応するということは、当然現実的ではありません。ただし、保育者が何も意識せぬまま母語の使用を禁止し日本語でのコミュニケーションを強要したりしてしまうと、その子は想いを届ける手段を失い、結果的にお友だちを叩いてしまう、といったことにもなりかねないので注意が必要です。

最近では、文部科学省「学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策について（報告）」（2016）や文部科学省「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査』の結果について」（2017）

などを契機に、国内での外国籍児童生徒の日本語指導に関心が集まるようになってきています。これらのなかでは、「幼稚園・保育園等との連携による就学前からのきめ細かな就学ガイダンス・日本語初期指導等の取組推進」の重要性なども挙げられています。簡単なことではないですが、保育者についても「言語」に対する原理的理解、さらには異文化生活をする子どもによく見られる「コードスイッチング」などへの理解が求められるといえるでしょう。

4．保護者との連絡手段

場合によっては、子どもとのやりとり以上に困難を抱えやすいのが、外国籍の保護者とのやりとりです。最近では、外国語への翻訳を担当する職員を加配し巡回相談を実施するなどの対応をしている自治体も増えています。とはいえ、外国籍の保護者がいる園の多くでは、日々の連絡帳やクラス便り等で情報を伝えることにも一苦労なのではないでしょうか。本講座のなかでは、実際に三重県が作成している入園手続き用の「多言語対応シート」や、一般財団法人「自治体国際化協会」がネット上で公開している「災害時多言語表示シート」などを紹介し、こうしたツールがあるだけでもコミュニケーションの幅が広がるということを実感していただきました。

5．まとめにかえて

今回、何よりも参加者に理解を促したかったのは、異なるルーツを有しながら日本で暮らす保護者が、日本の保育園・幼稚園に子どもを通わせるということは、いったいどういう選択の結果なのか、という点についてです。多くの保護者は「マジョリティへの同化」を選択することで、自文化の大半を我が子に伝えられないという苦しみを経験します。あるいは、日本にいながら敢えて自文化による生活を選択した場合、「日本社会におけるマイノリティ」として生きる道を子どもに与えるということにつながってしまいます。このような苦渋の選択のなかで、保育園・幼稚園に子どもを通わせているのだ、ということについては忘れてはなりません。

そもそも日本は、他のアジア諸国やヨーロッパ諸国と比べれば、多文化共生を考える機会が少ない国なのかもしれません。日本の保育現場に多文化共生という考え方が浸透しているかと問われれば、正直、否定的にならざる

を得ないでしょう。①自分のなかの「当たり前」の枠組みが何かに気づき、その枠組みを外すことが容易ではないことを理解する、②人種、宗教、民族等を問わず、すべての子どもが自らの所属する文化的集団の特性を尊重できるようにする、③少数派のニーズを無条件に受け入れるのではなく、文化的調整に基づいた公正な環境のなかで、すべての子どもの最善の利益を目指す、④多様性受容の視点を、カリキュラムはもちろん、あらゆるレベルの指導計画のなかに埋め込んでいく、といったことを保育者として考える必要があるのです。

最後に、当然、保育者養成課程においても、多文化共生について熟考する時間をもっと設けなくてはならないと思います。養成校の所在地付近で話されることが多い外国語について学んだり、「ハラール認証」について学んだりする機会はとても大切です。こうした授業を設けることで、無意識ながら「社会的排除」に加担してしまうような生活を改め、「社会的包摂」の考え方を広めていけるような保育者の養成が実現できるかもしれません。

参考文献

- J.ゴンザレス・メーナ著、植田都・日浦直美共訳『多文化共生社会の保育者』北大路書房、2004年
- 咲間まり子編『多文化保育・教育論』みらい、2014年
- 福岡貞子ほか編『多文化絵本を楽しむ』ミネルヴァ書房、2014年
- 田中治彦・杉村美紀編『多文化共生社会におけるESD・市民教育』上智大学出版、2014年
- 荒牧重人ほか編『外国人の子ども白書』明石書店、2017年
- 阿良田麻里子『食のハラール入門 今日からできるムスリム対応』講談社、2018年

Microsoft Excel講座・Microsoft Word講座

生活科学学科　生活情報専攻　准教授　平塚　紘一郎

(1) 活動方針

情報メディア教育支援室では、今年度も夏期休暇期間中にコンピュータに関する講座を開催しました(福井ライフ・アカデミー様と連携)。講座の目的は、コンピュータ等の基本操作を学んでいただき、普段の生活や仕事で活かしてもらうことです。対象は本学の学生や教職員、一般の方です。

講座は毎年内容を変えて開催しています。昨年度はExcelの講座のみでしたが、講座後のアンケートではWord等を扱う講座も開催してほしいとの要望がありました。そこで、今年度は新たにWord講座も開催しました。

Excel、Wordの両方について基礎講座と応用講座を開催することが望ましかったのですが、講師の都合等もあり、両方とも基礎講座のみを開催しました。Excel講座は昨年度の「Excel基礎講座」と同じ内容とし、Word講座は新規の内容としました。

(2) 取り組みと成果

講座は本学C108パソコン演習室で行いました。講座の際には本学のパソコンを参加者の方に使用していただきました。中間モニタを設置しているため、参加者の方々が操作するパソコンの画面の隣に講師の操作するパソコンの画面が写し出され、参照できるようになっています。

9月2日(日)
Excel 講座の様子

Excel講座は2018年9月2日(日)の9:00～16:00に行い、参加者は11名でした(一般の方のみ)。この講座では、Excelで簡単な表を作り、グラフを作成、書式等を変更できるようになることを目標としました。セルへのデータの入力方法、数式・関数の入力方法、罫線や塗り潰しといった書式の変更方法、グラフの書き方といった、Excelの基本操作の一連の流れについて取り扱い、機能の説明をしながら参加者の方にもExcelの操作を行ってもらいました。昨年度、少し進み方が速いというご意見も頂いていたため、講座の時間を1時間長くしてゆっくりと進めました。

Word講座は2018年9月9日(日) 9:00～16:00に行い、参加者は11名でした(一般の方のみ)。Word講座では、Wordで文、表、画像などを組み合わせた簡単な文章が作成できるようになることを目標としました。文字の入力や削除、移動やコピーといった基本的な内容から始まり、書式設定、箇条書き、表(Excelとの連携を含む)、画像、SmartArtなどについて取り扱いました。また、やや応用的な内容として、文章の開始、終了位置などを変更するためのルーラーや、文章を印刷する際に、宛先や日付などの一部の項目をExcel等の表から挿入する差し込み印刷についても簡単に触れました。図形についても取り扱っておきたかったのですが、時間の関係上割愛しました。

9月9日(日)
Word 講座の様子

(3) まとめと今後の課題

長時間の講座にもかかわらず、今年度も参加者の方々には熱心に講座を受講していただけました。昨年度までのご意見を反映したこともあり、講座後のアンケートでも、好評を得ることができました。

今後の課題は、まず講座の開催回数についてです。前述の通り講師の都合により基礎講座のみとなりましたが、もっと詳しく知りたいという方もいらっしゃったため、Excel、Wordそれぞれの応用講座も開催を検討したいと思います。また、例年要望があるPowerPointの講座についても開催を検討したいと思います。

スマートフォンやタブレットが普及してきており、家庭でのパソコン利用は減っていると思われます。しかしExcelやWord講座にもまだ一定の需要はあると思われます。来年度も講座をよりよいものへと改善しつつ、開催していきたいと思います。

孫育て講座

折り紙であそぼう！

幼児教育学科　教授　松川　恵子

折り紙遊びは子どもの遊びと思っておられる方が多いと思いますが、指先を動かすことが脳の活性化につながるとも言われています。今回は12月の開催ということで、お孫さんと一緒にクリスマスツリー作りに取り組んでいただこうと企画しました。

- 日　時：平成30年12月8日（土）
  午後2時～3時30分
- 会　場：仁愛女子短期大学　F102教室
- 参加者：６名（大人４名、子ども２名）

参加者の方は、お祖母ちゃんとお孫さん、お祖母ちゃんとお母さんとお孫さん、お祖母ちゃんお一人で、という計３組で、少人数でアットホームな雰囲気の中でちょっと難しいクリスマスツリーと飾り作りに挑戦していただきました。

初めに土台となるツリーを作りました。４つ切り画用紙（39cm×39cm、10cm×10cm、各1枚）を使用し、立体的で飾れるツリーを、ホワイトボードで作り方をお示ししながら作っていきました。その後、折り図を見ながら、サンタクロースやお星様など、それぞれに飾りたいものを作りました。お孫さんが分からないところをお祖母ちゃんが教えてあげたり、反対にお孫さんから教えてもらったりなど、お孫さんと一緒に楽しく教え合う姿が見られ、時間の経過とともに参加者してくださった方々の気持ちが溶け合っていくようなひとときをもつことができました。普段あまり使わない機能を使うことが多かったようで、脳トレにもつながったようです。

感想の中にも、「少人数で、とても親切に教えていただき、ありがとうございました。」「いつも一緒にいられないため、こんなよい時間をいただいたことは本当に感謝です。」などの温かいコメントをいただき、今後も、お孫さんと一緒にゆっくり楽しめる時間をつくっていただけたらと思いました。

公 開 講 座

プレゼンテーションのコツを学ぼう

生活科学学科　生活情報専攻　准教授　澤崎　敏文

今年度も「プレゼンテーションのコツを学ぼう！」と題して、効果的な発表の仕方や伝え方に関する公開講座を実施しました。

- 日　時：平成30年７月21日（土）
  午後２時～４時
- 会　場：仁愛女子短期大学
  C館２階 ラーニングコモンズ
- 参加者：15名

最近ではプレゼンテーションというと、パソコン等を利用したスライドの作成方法や話し方の技法に注目がいきがちですが、一番大事なことは、伝えたい内容を伝いたい相手にわかりやすく伝えるということ。昨年度から始まったこの講座では、昨年同様に、内容をしっかりと考えて、話の組み立て方を学ぶということに重点を置いて講座を進めていきました。

前半45分間は、プレゼンの組み立て方や内容に関する基本的な知識を学びます。起承転結ではなく、結論を最初に伝えることの効果や重要性などを学びます。後半は実践編ということで、参加者各自が準備してきた内容を、演習活動の一環として発表してもらいました。テーマは参加者各自が「これまで学んだこと、これから学びたいと思っていること」についてです。

５分という限られた時間ですが、実際に発表を行うことで、プレゼンテーションのコツを学ぶとともに、お互いの良かった点、改善点も共有できました。さらに、発表内容も参加者同士で共有することができ、学び多き講座となりました。

公 開 講 座

演 歌 で 学 ぶ 音 楽 の 世 界

幼児教育学科　教授　大久保　功治

【講座趣旨】

今日の社会にはさまざまな種類の音楽が溢れている。クラッシク音楽、ポピュラー音楽、商業音楽等々、世界のどの街においても容易に耳にすることができる。その多様性に、我々は「音楽に国境は無い」という言葉を思い出す。しかし、それらの音楽にじっくりと耳を傾けてみると、民族的、文化的、宗教的特徴が背景に潜んでいることが分かる。本講座では、日本の演歌を例にそれらを考え、音楽の楽しみを更に深めていく。

【開催期日・場所】

平成30年9月22日(土)　13:00～15:00
仁愛女子短期大学 E208

【講座内容】

①国名当てクイズ

4曲の旋律を聞き作曲された地域を当ててもらう。演奏はピアニカ演奏(写真1)で行い、できるだけ旋律以外の情報を絶って聞いてもらう。演奏曲は次の4曲。ウスクダラ(トルコ・中近東地域)ジャスミンの歌(中国)野ばら(ドイツ)子守歌(宮古島・琉球地方)。結果としてほぼ、皆さん正解をする。そこで、正解の理由は旋律を構成する「音階」にあることを理解してもらう。

②三分損益の法について

「音階」の構成音は地球上では例外なく半音と呼ばれる十二個の音で構成される。この十二個の音の成立理論である中国漢代の「三分損益法」を説明し、ドレミパイプ(写真2)で実習してみる。

③民族及び地域の音階の特徴について

十二個の半音から選ばれ構成された音組織が「音階」であるが、この音の選び方には民族・地域によって違がある。ヨーロッパでは7つの音を使った「7音音階」が主流で「長音階」「短音階」「教会旋法」がある。中近東地域でも主に7つの音が使用されるが、ヨーロッパの音階と比べると、半音的に変化する音が特徴的である。「マカーム」と呼ばれ多くの種類が存在する。中国とその周辺地域・極東地域では、5個の音を使った「5音音階」が主流である。これにも多くの種類がある。琉球地方の音階もこの種類の一つである。

写真1

写真2

④演歌の音階

演歌の旋律は例外なく「5音音階」で出来ている。その他、日本では民謡、軍歌、唱歌、歌謡曲、童謡、校歌等の楽曲にも多くの「5音音階」が使用されている。また、西洋風な流行歌やJポップと呼ばれる種類の音楽の中にも、「5音音階」がさりげなく使用され、ヒットの要因にもつながっている。星野源作曲の「恋歌」の冒頭部分を紹介する。

⑤類似する音階を持つ地域では親しまれる楽曲は共通する傾向が有る。

歌謡曲「北国の春」のチベット版を聴いてみる。チベットのオリジナル曲であるかのような錯覚を覚える。この曲は、中国大陸、その周辺地域で人気の名曲である。また、スコットランド地方の民謡には、ヨーロッパには珍しく「5音音階」が現れることが有る。明治期、西洋音楽を我が国の音楽教育の主流として導入することが行われたが、アイルランドの「5音音階は」日本人の琴線に触れ、教材として重要な役割を果たし今日でも愛唱されている。蛍の光、アニーローリー、ダニーボーイ、故郷の空(ドリフターズの「誰かさんと誰かさん」の原曲)など多数ある。このように、近代の国境という概念は、「音階の類似性」の前では、成立しない様である。

【終わりに】

参加者は少数であったが、終了後の多くの質問を受けた。音楽の楽しみは文化的な音楽教養を持つことによってさらに深く広がる。今後も様々な角度から音楽を考える講座を持てたら良いと感じた。

公 開 講 座

恋する山川登美子

平成30年9月15日(土) 14:00〜15:30 ／ 会場　B101

幼児教育学科　教授　前田　敬子

今年度初めて山川登美子講座を開催し、歌の特徴を紹介し、特にその恋の歌に焦点を当てました。

『明星』の女流歌人山川登美子が、鳳晶子(後の与謝野晶子)とライバル関係にあったことは広く知られます。一つには歌の、他の一つは恋のライバルです。晶子の『みだれ髪』は六章に分かれ、そのうち一つの章は登美子を歌う章なのです。登美子は父の薦める縁談で結婚、一旦『明星』を離れます。そのため「それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘れ草つむ」の一首は、晶子に「紅き花」を譲り自ら身をひく登美子の象徴のように語られます。しかし、その解釈は、その後の人生の明暗を反映させすぎるものです。なぜなら、この歌は「住の江」で詠まれたもので、「忘れ草」とはその地にちなんで詠み込まれたものにすぎないからです。高校古典で学ぶ土佐日記「忘れ貝」も住の江の話、住の江だから「忘れ貝」を詠むのです。したがって、登美子の歌も同様に「住の江にて摘める草にそへて」の添え書きとともに解釈されるものです。そもそも歌を詠んだ時点で「私は鉄幹先生を晶子さんに譲る」などと登美子が意図するものでしょうか、鉄幹には妻の瀧野がいました。瀧野が男子を出産した祝い歌を、晶子も登美子も残しているほどです。晶子の華々しい『みだれ髪』刊行もまだ先の話です。

写真1『明星』第六号〜八号、第十号の表紙、一條成美の画

登美子の生涯唯一独立した歌集『恋衣』は、与謝野晶子、増田雅子と三人の合同詩歌集です。登美子の章「白百合」の冒頭「髪ながき少女とうまれしろ百合に額は伏せつつ君をこそ思へ」の歌は、清楚で西洋的なイメージを醸し出していますが、この歌は登美子の日常生活を詠んだ歌というよりも、『明星』表紙絵(写真1)を歌ったように見えます。他にも「せめてただ女神の冠しろ百合の花のひとつと光そへむまで」は、『明星』に模写されていたミュシャの絵(写真2)を詠んだように見えます。

伝統的リズムを大胆に破る歌もあります。「木屋町は火かげ祇園は花のかげ小雨に暮るゝ京やはらかき」「地にわが影空に愁の雲のかげ鳩よいづこへ秋の日往ぬる」「くちなはの口や狐のまなざしや地の上二尺君は寵の子」など、冒頭に対句を置く漢詩あるいは四行詩に似ています。このすぐ後に石川啄木が三行分かち書きの短歌を発表しますが、それにつながる破調の要素をもつのです。

写真2　『明星』の挿絵

もっとも、この新しい試みも、登美子一人では成し遂げられなかったものでしょう。『明星』を出した結社名「新詩社」とは文字通り「新しい詩」の創造を意味し、機関紙『明星』も西洋絵画や訳詩を載せるなど、西洋の新しさを志向するものでした。登美子は大いに触発されていたでしょう。

そして、『明星』における登美子のはたらきは、晶子とは異なる美を描くことだったかもしれません。歌に詠まれる植物の歌を数え上げると、登美子では百合の歌が最も多く、「白百合」131首中10首です。晶子には牡丹、雅子には梅の歌が多く、再版では更に強調されて、三者三様の異なる魅力を醸し出すように、鉄幹が背後でイメージ調整を図った節があります。

『恋衣』には晶子の詩「君死にたまふことなかれ」も含

まれています。その詩が初めて『明星』に発表された後、国家への反逆として世間から大いに非難されたにもかかわらず、再度『恋衣』にも収められたのです。『恋衣』は当時の社会では、危険思想の詩歌集と見られたはずです。登美子「白百合」の章の最終部分にも反骨精神が表れています。晶子らと仲間になって歌を詠むことを大学から咎められたことに対する憤りの歌が並べられているのです。現代の目から見ると、そこにあるのは、徒な反抗心でなく、平和で自由な世界への憧れ、生命感あふれる原初的な美、若く瑞々しい夢や情熱の発露に見えるのですが。

では、登美子の内側から湧き出る、歌の個性とはどのようなものだったのでしょう。同時代評によると、「熱烈（激越の調）」「はげしさ」と表現されています。鉄幹も（登美子の死後に）「その人は我らが前に投げられし白熱の火の塊なりき」「口疾にも胸刺す歌のはげしさに人驚かす君なりし君」と激しさを指摘しています。歌の例を挙げると、「わが息を芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息に切る」と自らの内面の激情を歌う他、「狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髪ときさばき風にむかはむ」「今の我に世なく神なく仏なし運命するどき斧ふるひ来よ」など、思うに任せぬ人生を呪うような歌があり、その小刻みに畳みかけるリズムも内容の激しさに合致しています。このように気性の激しさを伝える歌が少なくないのです。

登美子の晩年、病苦の歌は痛切に胸に迫るものです。「胸たたき死ねと苛む嘴ぶとの鉛の鳥ぞ空掩ひ来る」「わが柩まもる人なく行く野辺のさびしさ見えつ霞たなびく」「後世は猶今生だにも願はざるわがふところにさくら来てちる」など、苦しみを芸術の高みに昇華して余人の追従を許さないものでしょう。

登美子は胸部疾患のため、二十九歳で世を去ります。晩年、熱を帯びた息とともにこぼれ出たような恋の歌が何首か見えます。「おもひつのりつのりはびこり大木の日を蓋うさまに君おもひけり（あなたへの思いがつのって、困ったことに、はびこって大木にまで成長し、遂に太陽を隠してしまった、そんなほの暗さのなか、私はあなたを愛している）」というのです。「はびこる」のもつ「育っては困るものが育ってしまう」語感が生きています。ところが、『明星』に掲載されたのは「ものおもひ二葉のほどと見たりしに大き木となり日を掩ふかな（二葉のように小さかった物思いが、いつしか大木となり太陽を隠すまでになった）」でした。この直しは、果たして登美子自身によるのか鉄幹によるのか。私には、登美子自身が直したとは思えません。なぜなら、原作「おもひつのり…」にあった、当人に制御できない恋愛のやるせなさが、すっかり抜け落ちてしまったからです。

登美子さん、あなたは先生にただ伝えたかったのでしょ？ なのに当の先生は、すっきりと整えてしまった。いつもながらの鮮やかな手腕で。

「あゝいはん君を恋しとなつかしと人たらずんば人たらずよし（もう隠さずに言いたい、あなたのことが恋しくてたまらない慕わしくてならないと。恥知らずだと言われても、もう構わない）」という歌もあります。焔の中を駆けつける愛しい人の幻を「君はきぬ焔の波をかいくぐりもゆるさんごを浮木にとりて（あなたは炎をくぐりぬけ、燃える珊瑚を踏んで、果敢に私に会いに来てくれた）」と思い描く歌もあります。登美子の病は熱を伴いました。鉄幹と出会って間もない頃、互いに焔をモチーフに詠み合った痕をたどることができるため、この「君」も鉄幹の姿ではないでしょうか。登美子の「ほほゑみて火焔も踏まむ征矢も受けむ安きねむりの二人いざ見よ」はそのときの歌です。

登美子の死後「トキハギ」に鉄幹と晶子は登美子を悼む歌群を載せました。鉄幹の歌「わが為に路ぎよめせし二少女一人は在りて一人天翔る」は、鉄幹にとって登美子が晶子同様に重要な存在であったことをうかがわせます。「すずしかる御瞳も見ゆうつぶしてぬれし頬も見ゆ前髪も見ゆ」は、登美子の愛らしい姿を詠んでおり、この歌を見せられた晶子は心中穏やかでなかったことでしょう。一方、晶子の歌は「挽歌の中に一つのただならぬことをまじふる友をとがむな」「亡き人を悲しねたしと並べ云ふこのわろものを友とゆるせし」など、登美子が私を「とがむ（咎める）」だろう、私は登美子のことが「ねたし（妬ましい）」という複雑な心境を表すものです。

※公開講座の折には、拙稿「『恋衣』再版の意図」（お茶の水女子大学国語国文学会『国文』2015年12月）、「創られた山川登美子像」（福井大学言語文化学会『国語国文』2017年3月）、「『花のちり塚』裏表紙不明文字の判読」（日本近代文学会『日本近代文学』2018年11月）を元に、多くの歌を挙げ、話も多岐にわたりましたが、紙幅の都合上、再構成しました。

公 開 講 座

歌 う 金 子 み す ゞ

平成30年10月8日(土) 14:00〜15:30 ／ 会場　B208

幼児教育学科　教授　前田　敬子

今年度初めて金子みすゞ講座を開催し、金子みすゞの歌を紹介し、創作に関する発見を伝えました。

金子みすゞの詩の魅力として、広く知られるのは「優しさ」。小さなものに目を配り、目に見えないものを見る「感受性の豊かさ」。「みんなちがってみんないい」のフレーズの肯定的メッセージ。「こだまでしょうか」のコミュニケーションの妙。だけど、みすゞも「みんなを好きに」なれないから、「みんなちがってみんないい」と思えないからこそ、作品が生まれたのかもしれません。

みすゞの作品は、西條八十に見出されて、雑誌に掲載されました。「どこかふつくりした温かい情味が謡全体を包んでゐる。この感じはちやうどあの英国のクリスティナ・ロゼッティ女史のそれと同じだ」という褒め言葉は多くの本に紹介されていますが、実は、八十は同時に難点をも指摘しています。「言葉や調子の扱ひ方にはずゐぶん不満の点がある」と言うのです。みすゞの作品を、現代の私たちは漠然と「詩」と受け止めがちですが、正しくは「童謡」ジャンルであって「詩」ではありません。

では、童謡（の歌詞）と詩とはどこが異なるか、八十はどのように考えていたか。当時の雑誌の選評を見ると、八十の考えがわかります。童謡には「歌へる調子」が必要だと書いています。みすゞの立場に立つならば、八十に指摘された欠点を直そうと努力を惜しまないでしょう。歌える調子を獲得するために、みすゞは何をするだろうかと考えた私は、八十の童謡掲載を求めるみすゞの投書と、八十の創った童謡（歌詞）を辿りました。そして、みすゞの作品には、八十の童謡の内容に向けて反論したり回答したりして内容を拡大発展させ、尚且つ、形式は連単位の対比を際立たせて整えたものが多いことに気付いたのです。

紙幅の都合上、数ある例の中から一例を示します。みすゞの代表作の一つ「星とたんぽぽ」と八十の「星と苺」を比べてみましょう。（「/」は改行を、「//」は連が分かれることを示します。）

写真1　みすゞの故郷仙崎にある壁画　2014.3 撮影

星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、/海の小石のそのやうに、/夜がくるまで沈んでる、/昼のお星は眼に見えぬ。/見えぬけれどもあるんだよ、/見えぬものでもあるんだよ。//散つてすがれたたんぽぽの、/瓦のすきに、だァまつて、/春のくるまでかくれてる、/つよいその根は眼にみえぬ。/見えぬけれどもあるんだよ、/見えぬものでもあるんだよ。（金子みすゞ　『全集Ⅱ』）

星と苺

赤い苺が/もう実らぬ/苺畑の/さびしさよ。//あちらこちらと/探しても/青い葉つぱに/風のおと。//赤い苺は /見えずとも/夏の夕べの/たのしさよ。//弟とあふぐ/大空に/星はすゞしい/数をます。（西條八十　『童話』大正十一年八月号）

八十「星と苺」は、「苺が消えた畑はさびしいが、空には星の数が増してたのしい」と歌います。みすゞ「星とたんぽぽ」は「昼の星や散ったたんぽぽは、見えないけれどもある」と歌います。これは、「消えたものの代わりに現れるものがある」と歌う八十に対して「見えないけれどもある」と反論しているように見えます。同時に、言葉の

写真2　みすゞの故郷仙崎　2014.3 撮影

「調子」を歌の一番二番のように連ごとの対比を整えたものです。このように八十の曲譜を元にしながら、連ごとの対比を整えた例が、他にも複数見出せることがわかりました。

八十の作品は既に曲がついて歌える調子を備えていますが、みすゞの方が一層、五線譜の下に歌詞を並べ書く形に整えてあります。歌の最大の聞かせどころ（所謂、「さび」）を繰り返し句にして―「星とたんぽぽ」で言うなら、「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」―、その言葉のリズムで、歌える調子を醸し出しています。他にも、「海と山」、「お月さんとねえや」、「まち」、「暦と時計」等、八十の曲譜を元に、みすゞが内容を拡大発展させ、歌える調子を整えたように見える作品が複数見つかりました。

みすゞ作品を縦断的に辿ると、初期の作品は、連ごとの対比形式が整っていません。五線譜の下に書くことが意識されていないのです。例えば、代表作の一つ「大漁」は、意味上の対比は「濱」と「海のなか」で明確なのですが、形式の上では、対比が整っていると言えません。

大漁
朝焼小焼だ/大漁だ/大羽鰮の/大漁だ。//濱は祭りの/やうだけど/
海のなかでは/何萬の/鰮のとむらひ/するだろう。
（全集Ⅰ・大正十三年三月号『童話』）

形式上の対比は無く、「ある一つの物事（たとえば「大漁」を）異なる二つの視点（たとえば「濱」と「海の中」）から順に表現する」のが、初期の作品の特徴なのです。それに比べて「星とたんぽぽ」は、「一つの視点から異なる二つの物事（「星」と「たんぽぽ」）」を表現しており、連単位の対比表現が、歌の一番二番を形づくり、あたかも五線譜下に歌詞を二段に重ねて書くことを想定したかのようなのです。

逆に晩年の作はどうでしょう。意味上の対比も形式上の対比も鮮明なのですが、中身の面で、「童謡」と呼ぶには躊躇する作品があります。「啞蝉」や「こころ」がそれです。

啞蝉
おしやべり蝉は歌うたふ、/朝から晩まで歌うたふ、//
誰が見てても歌うたふ、/いつもおんなじ歌うたふ。//
啞の蝉は歌を書く、/だまつて葉つぱに歌を書く、//
誰も見ぬとき歌を書く、/誰も歌はぬ歌を書く。//（秋が来たなら地に落ちて、/朽ちる葉つぱと知らぬやら。）（全集Ⅲ）

こころ
お母さまは/大人で大きいけれど。//お母さまの/おこころはちひさい。//だつて、お母さまはいひました。/ちひさい私でいつぱいだつて。//私は子供で/ちひさいけれど、/ちひさい私の/こころは大きい。//だつて、大きいお母さまで、/まだいつぱいにならないで、/いろんな事をおもふから。（全集Ⅲ）

「啞蝉」は書くことを禁じられ、密かに作品を書いても日の目をみることはないと悟るみすゞ、「こころ」は心の中が娘ふさえさんでいっぱいになるほど愛してやまない母としてのみすゞの姿を、投影しているように思えます。形式は整っていますが、果たして子どもが歌う楽しい童謡なのかは疑問です。ただ、作者の姿の投影という点は、みすゞが八十の童謡観を確実に受け継いだ証とも言えましょう。なぜなら、八十の有名は童謡「かなりや」について、作中の「かなりや」が自分自身を投影したものだと八十は明かしているからです。

現代の私たちは、金子みすゞの作品を「詩」と同様に受け止め、専ら意味を読み取ることに夢中で、「童謡」ジャンルとして受け止める認識は薄いかもしれません。しかし、みすゞ自身は、歌うための「調子」を創ることに心を砕いていたことが、八十の曲譜との比較を通して理解されるのでした。

※日本児童文学会の2017年秋季大会で口頭発表した内容を論文化、応募して、2019年3月発行の学会誌『児童文学研究』に掲載が決まりました。公開講座で、成果の一端をお伝えしようとしたのですが、やや時間切れとなりました。内容を更に短縮しました。

新人保育者スキルアップ講座
幼児教育学科

■日時　平成30年5月19日（土）　13:00〜15:30
■会場　E208

卒業生で、就職1年目の保育者16名が集い、まず「子どもの見方・子どもとのかかわり方」と題する乙部貴幸先生の講座に参加しました。その後、クラスごとのテーブルで懇談会を開きました。

保育教諭9名、保育士6名、幼稚園教諭1名で、4名はゼロ歳児担当、3名は1歳児、5名は2歳児、3名は3歳児、1名は4歳児を担当。保育者の第一歩を力強く踏み出し、頼もしい限りです。

アンケートによると、講座には、「学生の時とは違って『こういう子いますよね』という先生の一言にも、パッと園の子どもの顔が浮かんできた。働いてみて聞くと、授業の大切さを強く感じた。」「子どもの問題行動には何か理由があるということが分かりました。今までの私は、そんなことを考える余裕がなく、叱っていました。子どもの想いや考えをくみとることの大切さを学ぶことができました。」などの感想がありました。

懇談会は「久しぶりに会話ができて、悩みも解消されてとても楽しかったです。」「同じ大学に通って、同じ1年目の子たちと情報を共有できて嬉しかったです！あと、先生方からのありがたいお話を聞いて感動しました。ありがとうございました。」とのこと。久しぶりに集い、参加者みんな笑顔になれました。

（文責　前田敬子）

幼教卒業生OGのつどい
幼児教育学科

■日時　平成30年10月27日（土）　13:30〜15:00
■場所　C館2階　カフェテリア内（南東）

企画担当者は、福井新聞情報ぷりん掲載、卒業後4〜6年目の方々（総勢約330名）に案内葉書、直接のお声掛けなど、あらゆる手段でお誘いをかけたのですが、新人保育者にとって土曜午後の外出は思うに任せず、今年も参加人数は13名に留まりました。一方、教員参加は多く、松川学科長、重村先生・江端先生・木下先生・乙部先生・内田先生の軽妙な語り口のおかげで、華やかな会になりました。担当の前田も控えておりました。自由な歓談の後、先生方のご協力も仰ぎ、盛大に（?）豪華（?）景品（参加賞）付きビンゴゲームをしました。ほどよく盛り上がりました。

本学同窓会の催しがC館カフェテリア付近であると伺い、敢えてその一角をお借りできるよう、年度当初からお願いしておいたのです。窓際の明るいテーブル席で「OG会」と遠目にも分かる紙を貼りました。長期的視野に立ち、この企画の知名度を上げるとともに、多くの卒業生に、母校や母校同窓会に親しみをもっていただく効果を期待したのです。地域に根付く学び舎の長所は、同窓生が母校のサポートを身近なものに感じ、繋がりを保てることにあり、特に卒業後4〜6年目の離職を防ぐ効果も期待されて、理念の上では継続が望まれる企画だと思います。

しかしながら、数年来、企画担当者が交替しつつも強力に働きかけてきたのに、参加者が少ない状態が続いたこと、今年も可能な限りの努力をし、熱意をもって誘いをかけたけれど、参加者が依然として少なかったことから、企画そのものを見直す必要を感じています。

（文責　前田敬子）

地 域 連 携

森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携事業報告

地 域 活 動 実 践 センター

「森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携に関する協定」が平成22年8月30日に締結されました。この協定に基づいて、平成30年度も相互に連携・協力して様々な事業を行いました。

1　森田地区・仁愛女子短期大学連携協議会

「平成30年度　森田・仁愛女子短期大学連携協議会」が、6月19日（火）に仁愛女子短期大学で開催されました。

森田地区から佐孝文化委員会委員長、柳原森田公民館館長、吉田森田公民館主事、本学から内山学生部長、朝倉事務長、大西地域活動実践センター長、木下地域活動実践センター主任、小角地域活動実践センター係長が出席し、平成29年度に実施した連携事業の報告及び平成30年度実施予定の連携事業について協議を行いました。

2　森田公民館と地域活動実践センターの事務打合せ

事務打合せが、平成31年2月1日（金）に仁愛女子短期大学で開催されました。

森田地区から柳原森田公民館館長、吉田森田公民館主事、本学から内山学生部長、大西地域活動実践センター長、木下地域活動実践センター主任、小角地域活動実践センター係長が出席し、平成30年度の振り返りと平成31年度実施予定の連携事業等について話し合われました。

3　継続事業

本年度の継続事業として、もりた夢駅～冬物語～（12月8日（土））、もりのわフェスタ（9月22日（土）・23日（日））、森田地区児童館における「英語であそぼう」講座（8月）、JR森田駅の夢ギャラリー森田へ作品展示等を実施しました。

また、森田地区の方への本学附属図書館の利用サービスも実施しました。本年度は、新規利用申請者11名、利用人数69名、貸出冊数125冊でした。

4　森田地区(九頭竜大学)の本学キャンパス見学会

森田公民館では、教育事業の一環として高齢者学級の九頭竜大学を企画しています。本年度もその一環として、7月18日（水）に九頭竜大学の本学キャンパス見学会を実施しました。

昨年度同様に、生活情報専攻のゼミ中間発表会に参加していただき、発表内容について学生と意見交換をする等、学術的な交流も深めることができました。また、図書館見学、図書館利用サービスの新規登録、学食体験を行いました。

5　仁短祭での模擬店出店

九頭竜大学の方による、本学大学祭への模擬店出店が10月27日（土）に実施されました。このように大学・地域の祭に相互参加することで、学生との相互理解・交流が図られました。

福井市との連携事業

もりた夢駅～冬物語

生活科学学科　生活デザイン専攻　教授　内山　秀樹

11年目を迎えた「もりた夢駅」、森田地区文化委員会と「遊房」(福井大学)と本学が連携して12月8日(日)に開催しました。バスや駅に関心を持っていただき、歩いて暮らせるまちづくりを推進することを目的として、内容を刷新しました。

“もりのわフェスタ”と同様、生活デザイン専攻1回生21名は「環境デザイン概論」、内山研究室2回生7名はゼミ活動の一環として参加し、ゼミ生は企画段階の会議にも参画しました。会議で検討を重ねた結果、大きく変わりつつある森田を子ども達に知っていただくために、試行運行を始めた“もりたんバス”で巡る「森田の魅力発見ツアー」を「遊房」が担当。本学は、駅への関心を高めるための企画として、ゼミ生が「タイムスリップ森田駅」と題して「宿直室ギャラリー」と「教えて！昔の森田駅」を、1回生は「デザイン遊び」を担当しました。

当日は朝から氷雨模様でしたが、約80人の親子が参加。「森田の魅力発見ツアー」では荒天の中バスに乗り遅れたり、氷雨にぬれながらの竹灯の準備など大変な思いをしました。

今回は、コミュニティバスを使って移動するという初めての試みで、多少の失敗もありましたが、その意義は共有できたのではないかと思います。また、「タイムスリップ森田駅」での「教えて昔の森田駅」には多くの地元の方や学生が興味深く昔の駅に様子に聞き入り、実際使っていた宿直室での昔の駅や街の写真を興味深そうに見ていただき、有意義な時間を共有できたのではないかと思います。

教えて！ 昔の森田駅

もりたんバスでめぐる森田の魅力発見ツアー

寒くて大変！ 反省点もあったけど、それも学びの一つ。

竹灯にチャレンジ！

福井市との連携事業

もりのわフェスタ

生活科学学科　生活デザイン専攻　教授　内山　秀樹

森田地区エコキャンドル実行委員会が、一昨年まで7月末の森田まつり会場で行ってきたエコキャンドルを発展させたもので、昨年より“新住民と旧住民の交流”、“環境にやさしいまちづくり”をテーマに、「マイアクア」で開催しています。今年は9月22日（土）10時から「もりのわマルシェ」と「あそびのひろば」がオープンし、夕方6時からは「エコキャンドル」が始まりました。

本学は、生活デザイン専攻1回生28名が「地域環境論」の一環として、内山研究室2回生7名がゼミ活動として「あそびのひろば」を企画・運営するともに、ゼミ生は企画力を高めるために実行委員会にも参画しました。

あそびのひろばの企画検討にあたり、NPO森のほうかごがっこうのスタッフを招いて、子供達が関心を持つためのポイントや企画する上での留意事項などについてレクチャーを受け、3回にわたるワークショップで企画を絞り込みました。その結果、1回生は「もりのわ3丁目 まちをつくろう」、「ちょきちょきぺったん」、「かっぱの水あそび」、「もりのわ商店街」を、2回生は昨年好評だった「水鉄砲づくり」を行いました。

会場に材料を搬入して準備を始めた1回生は、屋外での企画のスケール感がつかめず戸惑いながらの準備でした。11時頃には子ども達でいっぱいになり、本学生たちと一緒にダンボールで思い思いのまちを作ったり、お面や水鉄砲などのものづくりに興じたり、カッパ役の仁短生を追いかけながら水風船をなげ、あちこちで歓声が上がりました。

多くの親子に来ていただいて、喜んだり感動したりする様子を見て、学生たちはやりがいや達成感を得た一方、天候に左右されたり、お客の呼び込みの難しさ、ダイナミックさが求められる屋外企画の難しさ、事前準備の重要性などを学んだようです。

マイアクアをバックに！

カッパの水遊び

もりのわ3丁目　まちをつくろう

福井市との包括連携事業

福井国体で来場者の方々に料理をふるまうプロジェクト

「ふるマイスター」のエプロン・三角巾をデザイン。

生活科学学科　生活デザイン専攻　教授　西畑　敏秀

2018年秋に開催された福井しあわせ元気国体の期間中、福井市内で開催された14競技会場で、市から「ふるマイスター」に認定された32団体が、地元の食材を使った料理で来場者の方々をもてなしました。そのエプロンと三角巾のデザインを生活デザイン専攻の学生たちが担当。5月10日のグラフィックデザインの授業には、はぴりゅうも参加。28名の生活デザイン専攻の学生たちが、コンピュータのデザインアプリを使って大会マスコットや福井の特産品をイメージさせるイラスト、もてなしの福井弁などを構成。できあがったアイデアを学生たちの投票などで採用案が決定しました。採用されたエプロンのデザインは、大会マスコット5体が「福井で会おっさ！」と呼びかけている竹内来海のデザイン（右-1）。三角巾は、はぴりゅうがおにぎりをほおばりながら、来場者を迎えるという高島璃奈のデザイン（右-2）。8月4日（日）にハピテラスで開催された「開幕55日前イベント」でお披露目されました。（写真上）

授業にはぴりゅうも参加して、大いに盛り上がりました。

1. 竹内来海デザインのエプロン

2. 高島璃奈デザインの三角巾

福井市との包括連携事業

福井市のごみ分別、削減を推進するキャラクター
リサイクル戦隊「ワケルンジャー」のポーズ考案。

生活科学学科　生活デザイン専攻　教授　西畑　敏秀

福井市市民生活部収集資源センターの依頼で2003年より制定された「リサイクル戦隊ワケルンジャー」の再認識を目的とした新しいポーズイラスト作成がありました。そこで2回生の田口こころと富田夏美が卒業研究としてとりくみ、現状の問題点や、実際に使用する場合のバリエーション等取材を重ね、まず仁短のごみ環境から調査をスタート。実際の現場の問題点を知ることで、より今後様々な用途で活躍できる新しいキャラクターのポーズが卒業研究で発表されました。

問題点の調査や改善点など、何度も市役所にてミーティング。

さまざまな用途を想定して考案した、ワケルレッドのポーズ。

卒展会場に来ていただいた福井市の担当の方々と。

福井市との包括連携事業

ふく²ベジ・ファースト応援事業

生活科学学科　食物栄養専攻　教授　牧野　みゆき

ふく²ベジ・ファースト応援事業では、ベジ・ファースト（まず野菜から食べる）を合言葉に、食を通じた健康づくりを推進するための情報発信役として平成28年度から「ベジ・ガールズ」として食物栄養専攻の学生が活動してきました。3代目となる30年度の「ベジ・ガールズ」には2回生４名が任命されました。

30年度の活動は、まず10月14日に福井駅前のハピテラスにて行われた「食育フェスティバル」において、野菜から食べる「ベジ・ファースト運動」をPRしました。

次に、10月20日に福井中央卸売市場で開催された「市場フェスタ」において、大勢の人で賑わう中、福井市保健センターのコーナーで肌年齢測定や血管年齢測定への参加を呼びかけたり、食物栄養専攻の学生が考案した野菜たっぷりレシピを配布しながら、野菜から食べる「ベジ・ファースト運動」をPRしました。元気いっぱいの学生の呼びかけに応じていただき、予想以上に早くレシピがなくなりました。

生活情報専攻が今年度福井市に依頼された「元気体操21」のDVD動画制作とともに、ベジ・ガールズのクッキング動画を撮影してくれました。これまでも福井市は料理サイト「クックパッド」で野菜たっぷりのレシピを紹介していますが、動画でよりわかりやすくなりました。学生は少し緊張していましたが、簡単野菜レシピ「キャベツのナムル」「きゅうりの梅おかか和え」を楽しく紹介しています。YouTubeでも見ることができます。

今年度はハピリンにある福井市観光物産館「福福館」で期間限定で提供予定の地場産野菜を使用したメニューの考案を食物栄養専攻の学生が依頼されました。10～11月は大根と赤かぶら、2月下旬はねぎまたは春菊・水菜・ほうれん草などの葉物野菜の指定があり、2回生全員がレシピを考えて７月に試作を行い、提供メニューの候補8品を決定しました。

「福福館」では2月19日～25日に旬のねぎ料理としてひき肉とご飯などを混ぜたものを白ねぎの内側に詰めた「ねぎ焼き串焼き」と、薄揚げの上に小口切りにしたねぎとチーズなどをまぶして焼いた「ねぎたっぷりおあげピザ」が毎日各20人分ほど提供されました。

食物栄養専攻では、今後もこのような事業を通して地域の方々の健康づくりの応援に努めていきます。

福井市との包括連携事業

ベジ・ファースト＆元気体操21啓発のための動画作成

生活科学学科　生活情報専攻　准教授　澤崎　敏文

仁愛女子短期大学では２年前から福井市と連携してベジ・ファースト運動のロゴマークデザインや健康レシピの開発に取り組んでいますが、３年目となる今年は、ベジ・ファースト運動と元気体操２１を普及・啓発するための動画作成を行いました。

春ごろから市の担当者の方々と打合せをスタートし、シナリオ作成から撮影場所の選定まで、学生たちが試行錯誤しながら進めてきたプロジェクトです。

８月ごろまでかけて内容・シナリオを検討。９月に撮影場所等を下見し、10月上旬から撮影を開始、11月中旬までかけて撮影、12月に動画の編集を行いました。その間、PRポスターのデザイン（芸能人起用）やDVDのジャケットデザインを行い、本格的な動画作品として１月に完成しました。

動画は大きくわけると２部構成となっています。第１部は、学生自らが演じるベジ・ファースト運動啓発のためのPRドラマ、協力企業へのインタビュー、健康レシピの作り方紹介、第２部は、健康体操２１のお手本となる練習用動画、約300名の市民参加による体操動画です。特に、体操のお手本動画では、この体操を考えていただいた健康運動指導士の漆崎由美先生にも出演していただき、生活情報専攻学生のナレーションによる音声ガイドも付けました。また、市民参加動画では、大勢の福井市民の方々が、一乗谷朝倉氏遺跡、たかす海水浴場、福井中央公園、仁愛幼稚園にて「元気体操２１」の体操をおこなっている風景をドローンによる空撮も取り入れて撮影しています。福井中央公園での撮影時には、福井市宣伝隊長「朝倉ゆめまる」くんにも参加してもらうなど、体操PRだけでなく、見て楽しめる動画になるような工夫も随所に取り入れました。

完成した動画はDVDとして福井市内の公民館に配布されていますが、それに加えて、YouTubeにも市保健センター専用チャンネルを開設し動画の配信を行っています。パソコンやスマホでも手軽に見ることができますので、ぜひ「ベジ・ファースト運動」「元気体操２１」の啓発動画をご活用ください。

「元気体操21」市民参加バージョン
動画はこちらからどうぞ

包括連携事業

永平寺町との包括連携事業

地域活動実践センター

永平寺町との包括連携協定の締結

巻頭言の＜はじめに＞でも触れましたように、永平寺町と仁愛女子短期大学は平成30(2018)年5月15日に「包括的連携に関する協定」を締結しました。右の写真は本学の禿正宣学長(向かって右)と永平寺町の河合永充町長とがガッチリと握手を交わしている様子です。

この協定に基づき、今年度は以下の項目で協力した取り組みを行いました。

連携事業一覧

以下の「連携事業一覧」の他、醗酵文化研究協議会への参画や、永平寺町PRデザインの学生参加についての協議会への参画等を行っております。

【全体研修会「保護者とのかかわり」】

タイトル：「保護者との関わり　～相談支援～」
内　　容：事例に基づき子育ての悩みにどう対応するのか
講　　師：本学 幼児教育学科　准教授　賞雅さや子
開催日時：平成30年11月19日(月) 19:00～20:30
会　　場：永平寺町　本庁　大会議室
参加人数：保育者　約70名

【全体研修会「教育要録、保育要録について」】

タイトル：「教育要録、保育要録について学ぶ」
内　　容：３法令に伴う改訂のポイントや記録の書き方について
講　　師：本学 幼児教育学科　准教授　増田　翼
開催日時：平成31年2月28日(木) 19:00～20:30
会　　場：永平寺町　本庁　大会議室
参加人数：保育者　約70名

【えいご教室】

タイトル：えいごであそぼう
内　　容：５歳児を対象に、英語にふれ、英語を通してコミュニケーション演習を実施
講　　師：本学 生活科学学科　准教授　野本尚美
開催日時：①平成30年12月17日(月) 10:00～10:45
〈松岡西幼児園18人〉
②平成30年12月19日(水) 10:00～10:45
〈なかよし幼児園18人〉
③平成31年1月21日(月) 10:00～10:45
〈松岡幼稚園10人、吉野幼稚園10人、松岡東幼児園10人〉

【園への訪問】

タイトル：気になる子への関わり方（園巡回、保護者相談）
内　　容：子どもの見方、特別支援の方法、保護者相談 等
講　　師：本学 幼児教育学科　講師　中尾繁史
開催日時：通年
会　　場：永平寺町の幼稚園・幼児園
参加人数：保育者　約100名

福井しあわせ元気大会・全国障害者スポーツ大会サポートボランティア

生活科学学科　生活情報専攻1回生・幼児教育学科1回生
学生部　学生生活課

平成30年度に開催された、福井しあわせ元気国体および福井しあわせ元気大会（全国障害者スポーツ大会：略称障スポ）には、本学からも、開会式の式典演技、競技補助、競技場でのふるまい料理、ふるマイスターのエプロンデザイン、選手団サポートボランティアなど、多くの学生や教職員が携わりました。

参加した学生は、選手が快適な環境のもとで競技を行うことができるよう、各県の選手団に同行し、移動介助や応援をはじめとした様々なサポートを行いました。本学からは、生活科学学科生活情報専攻1回生42名、幼児教育学科1回生106名、合計148名がサポートボランティアとして参加をしました。

●選手団サポートボランティア養成研修（9月21日）

養成研修では、福井県障害者スポーツ大会課から講師をお招きし、介助や誘導のサポート方法、障スポの概要、ボランティアとしての心構え等についての説明を受けました。

●応援グッズ横断幕作成（9月26日）

自分が担当するチームの応援用横断幕を作成しました。学生の中には、選手団に喜んでもらえるようご当地のキャラクターを描いてみたり、『頑張れ』の方言を調べたりと、個性ある色鮮やかな横断幕が沢山出来上がりました。また、作成している様子をテレビ局にも取材をしていただきました。

●車椅子バスケットボール競技（10月5日～8日）福井県営体育館

今大会、全国初の取組みで『国体と障スポの融合』が実施されました。これは、障がいがある人もない人も一緒にスポーツに参加し交流する機会を拡大しようという取組みです。本学からは、その取組みの一つ、国体会期中に実施される『車椅子バスケットボール』の競技に、生活科学学科生活情報専攻の1回生がサポートボランティアとして参加をしました。殆どの学生が見るのも初めてで最初戸惑いがありましたが、選手の頑張る姿に感化され次第に選手とコミュニケーションがとれるようになっていきました。試合では、観戦に来ていた県民の皆さんと一緒に選手を応援し会場を盛り上げていました。

●フライングディスク競技（10月11日～16日）
三国運動公園陸上競技場

●バレーボール（知的）競技（10月11日～16日）
トリムパークかなづ体育館

幼児教育学科1回生全員は、フライングディスク競技と、バレーボール（知的）競技の2競技を担当しました。学生は連日早朝に集合をして、選手団が競技会場に到着する前から選手団の皆さんが心地よく競技に専念できるようボランティアの準備をしていました。また、試合では練習の成果が発揮できるよう一生懸命応援をしていました。学生の中には、選手と一緒に練習をし、選手と一緒に喜び、チームメイトのように選手と接している学生も見受けられました。

●福井しあわせ元気大会閉会式（10月15日）
福井県営陸上競技場

閉会式後、解団式のセレモニーが各選手団ごとに行なわれていました。数日間という短い期間でしたが、選手団との最後の別れに涙を流す学生も･･･。自分が着ていたボランティアのベストに記念のサインをしてもらったり、自主的にプレゼントを渡したり、お別れの時には選手団のバスが見えなくなるまで、学生は手を振り続けていました。

●選手団サポートボランティアに参加してみて（最後に）

本学では、福井県からの要望を受け約3年前から障スポの準備をしてきました。平成最後の年に、選手団サポートボランティアとして大会に携わることができ、また、福井国体・障スポ成功の一助になれたことを大変嬉しく思っています。障スポの裏話ですが、仁短生のボランティアベストの右肩には、可愛いハートマークをつけました。これは、50年に一度のこの貴重な経験をとおして、建学の精神でもある『仁愛兼済』を実践し何かを学んでほしいという学園の思いと、仁“愛”のチームワークを何か表せないかという教職員のアイデアでできた仁短オリジナルのマークでした。学生は、ボランティア活動をとおして選手団の方々とふれあうことで、障がいのある人への考え方が変わったり、誰かに感謝をされるという貴重な経験ができたと思います。大会後、各選手団から沢山の感謝状やお礼の記念品をいただきました。きっと学生のおもてなしの気持ちが、選手団の方々に届いたのだと思います。活動終了後、学生が口を揃えて、『大変だったけど、本当に楽しかった。やってよかった。』と言っていたのがとても印象的でした。学生はボランティアを経験したことで、障がいのある人への理解を深め、ボランティアとして地域で活躍するきっかけができたのではないかと思います。選手団サポートボランティアに参加した学生の皆さん、そして、関係者の皆さん本当にお疲れ様でした。

多文化体験プログラム

英語で遊ぼう！

生活科学学科　生活情報専攻　准教授　野本　尚美

平成30年度は、以下の日程で親子、幼児、小学生を対象とした英語教室（多文化体験プログラム）を開催しました。（　）内は各回の参加者数です。

（1）AOSSA子育て支援室「えいごであそぼう」
- 5/26（土）13:30～14:30（0~6歳児とその保護者約25組）
- 11/17（土）10:30～11:30（0~6歳児とその保護者約20組）

（2）森田地区児童館における英語教室
- 8/ 6（月）10:30～11:30　森田第2児童クラブ（30名）
- 8/ 6（月）13:30～14:30　森田第4児童クラブ（27名）
- 8/ 8（水）13:30～14:30　森田第1児童クラブ（22名）
- 8/ 9（木）10:30～11:30　すみれ児童館（50名）
- 8/10（金）13:30～14:30　森田第3児童クラブ（34名）

（3）仁短祭多文化体験プログラム「えいごのゲームであそぼう!」
- 10/27（土）10:00～15:00

（4）永平寺町幼稚園・幼児園における英語教室
- 12/17（月）10:00～10:45　松岡西幼児園（18名）
- 12/19（水）10:00～10:45　なかよし幼児園（18名）
- 1/21（月）10:00～10:45　松岡幼稚園（30名）

（1）AOSSA子育て支援室「えいごであそぼう」

5月のテーマは「バスに乗っておでかけしよう」でした。お父さん、お母さんのお膝の上にお子さんを乗せていただいて、“The Wheels on the Bus”を一緒に歌いました。動物園の絵本でいろいろな動物の名前を学習した後、今度はハンバーガー屋さんでお買いものをするという設定で、店員役の学生と“Here you are.” “Thank you.”などの会話のやりとりを楽しんでもらいました。英語サークルの学生たちが作ったトマトやレタス、チーズなどはどれも本格的な出来栄えで、ご参加いただいた保護者の方からも大変好評でした。

11月のテーマは「形であそぼう」でした。circle, square, triangleなどの単語が出てくる“The Shape Song”を歌いながら、いろいろな形を探してタッチをするゲームをしました。雪だるまが出てくる絵本を読んだ後、紙とのり、色鉛筆を用いてみんなで雪だるまを作る工作をしました。その際、雪だるまの頭に乗せる四角型のバケツの色は“What color do you like?” “I like orange.”といった会話を通して好きな色を選んでもらいました。ご参加いただきました皆様、どうもありがとうございました。今後も親子でふれあいながら英語を楽しめるような企画を考えていきたいと思います。

AOSSA 子育て支援室（動物の名前の学習）

AOSSA 子育て支援室（英語を用いたお買いものごっこ）

(2) 森田地区児童館における英語教室

森田地区児童館における英語教室も今年で3年目となりました。これまでの経験をふまえ、英語が好きな子も嫌いな子も、みんなが一緒に楽しめる内容にしたいと思い、学生たちとアイデアを練った結果、今年のテーマを「マジック」にしました。5月頃から学生たちとマジックの本を数冊読み、安全で面白く、かつ子どもたちがその場で一緒にできるようなマジックを選び出し、準備に取り掛かりました。当日は子どもたちに3〜4つのグループに分かれてもらい、そこに学生が一人ずつ入って子どもたちにマジックのやり方を教えました。しばらく練習したあと、1グループずつ前に出てもらって皆の前でマジックを披露してもらいました。グループの発表が終わった後、そのマジックで用いたものの名前や色、動物などの英語を全員で学習しました。最後にはみんなで2本の毛糸を使ったマジックを行いましたが、その際には英語でコミュニケーションを取る楽しさも感じてもらいたいと考え、学生と子どもたちが一人ずつ “What color do you like?” “I like blue.” という英語のやり取りを行い、自分の好きな色の毛糸を使ってもらいました。どの子も自分の好きな色をしっかりと英語で伝えられていました。

森田地区児童館（“What color do you like?” “I like blue.”）

森田地区児童館（毛糸を使ったマジック）

仁短祭の様子

仁短祭の様子

(3) 仁短祭多文化体験プログラム「えいごのゲームであそぼう！」

昨年に引き続き、今年も学生ホール1階にて英語を用いたゲームコーナーを開催しました。英語サークルで話し合い、8月の森田地区児童館での英語教室を踏まえ、今年のテーマを「色」に決定し、9月から準備を始めました。動物や野菜、フルーツなどが書かれたカゴにボールを投げ入れ、ボールが入ったものの色を英語で言うというゲームです。今年も多くの子どもたちがゲームに参加してくれました。何回も来てくれる子や、学生に「どこを狙ってほしい？」と聞いてくれる子もいました。学生たちも多くの子どもたちとふれ合えたことをとても喜んでいました。参加していただいた皆様、どうもありがとうございました。

(4) 永平寺町幼稚園・幼児園における英語教室

5月に永平寺町と本学の包括的連携協定が締結されたことをきっかけとして、永平寺町の3つの幼稚園、幼児園にて英語教室を開催させていただきました。テーマは子どもたちが親しみを持てる「動物」に設定しました。音楽に合わせて体を動かしたり、動物のかるたをしたり、半分に切ったカードを使って同じペアの子を探すゲームなどを行いました。どの子も私の話す単語に一生懸命耳を傾けてくれましたし、動物の単語や“Here you are.”“Thank you!”という言葉を大きな声で話してくれる姿には大変感動しました。また、園の先生方とも講座の前後にお話をさせていただきましたが、先生方が子どもたち一人一人の成長をしっかりと見守っていらっしゃる様子が大変印象的でした。来年度は本学の学生も連れて行き、異文化や外国語に対する理解、興味を深められるような活動ができればと思います。ご参加いただいたみなさん、先生方、本当にありがとうございました。

なかよし幼児園での様子

松岡西幼児園での様子

松岡幼稚園での様子

図書館企画展示の活動報告

附属図書館　竹下　真弓

図書館では「図書コミュニケーション」をキャッチフレーズに知的好奇心を共有する安らぎの場として、月1回のペースで企画展示を行っています。閲覧は可能ですので、是非ご来館ください。また、本学卒業生と森田地区住民の方には貸し出しを行っています。詳細は附属図書館ホームページ（http://www.jin-ai.ac.jp/lib/）をご覧ください。

●2018年4月「本屋大賞受賞作品展」

2018年本屋大賞受賞作『かがみの孤城』辻村深月著をはじめ、候補作品９冊を展示しました。

● 2018年5月「学園長の俳画展」

約200作品の中から22点を選び展示しました。法語に俳画を添えた作品は、見応えのある素晴らしいものばかりで、学生も足を止めてじっくり見入っていました。

● 2018年6月「創作絵本展」

本学の生活デザイン専攻2回生が「デッサンⅡ」の授業で創作した27作品を展示しました。絵もストーリーも独創性あふれるオリジナル作品です。

●2018年7月「仁短文庫～みんなの文庫」

友達に紹介したい、オススメしたい本を募集し、選ばれた図書を展示しました。学生が選んでくれた様々な分野の本がずらりと並びました。

● 2018年9月「絵本のいち見開き作品展」

幼児教育学科「言語」（2回生）の授業で創作された作品です。学生が工夫して創作した貼り絵とそれに添えられた言葉を楽しみました。

● 2018年9月「図書館サポーター選書本」

図書館サポーターが書店で選書した図書など82点をおすすめのコメントを添えて展示しました。様々なジャンルが揃っているため、毎年学生の人気を集めています。

● 2018年12月「ふるさと風花文庫」

昨年に引き続き、福井県立図書館「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会様より、若い世代が読書や文芸創作への興味・関心が高まることを目的として選書された「ふるさと風花文庫」全110冊を12月～3月まで貸し出していただきました。福井ゆかりの作家や、福井を描いた作品も多数あり、バラエティ豊かな文庫を前に学生は興味津々に選んでいました。

● 2019年1月「第6回青空文庫表紙コンテスト」

Webサイト「青空文庫」には著作権の切れた古い文学作品が掲載されています。その中から3作品（今年は、『黄金風景』・『なめとこ山の熊』・『ヘンゼルとグレーテル』）を図書館が選び、作品の持つ魅力を一層際立たせる様な「表紙デザインコンテスト」を行いました。優秀賞受賞者には、副賞として図書カードと作品を表紙にした文庫本を贈呈しています。

※今年度優秀賞受賞作品

● 2019年1月「小倉百人一首大会」

この大会は、百人一首を通じ親交を深めることを目的に開催しました。授業の空き時間や、お昼休みなどに83名の参加者が百人一首の魅力に触れていました。

今後も、図書館が様々な人との交流や出会いの場、また安らぎの空間になるよう目指していきたいと思います。

平成30年度 報告

AOSSA　福井市子ども家庭センター　子育て支援室　相談室

副室長　野路　昌美

当センター子育て支援室と相談室は、福井市地域子育て支援センターと福井市独自の家庭相談機能を持ち併せており、子育て家庭への支援について福井市と連携しながら日々事業運営に努めている。

【子育て支援室】

子育て親子の交流の場の提供等を柱として、子育て支援に関する事業を展開している。今年度、子どもの人数と同伴者(保護者)の人数を併せた総利用人数は、16,598人であった。当センターは駅前のシンボル的な建物にあり、県都中心地という立地から、市内外からの利用、アオッサへの立ち寄りや電車待ちの利用、帰省中滞在時や旅行中の利用、転勤家庭や外国籍家庭の利用など、多くの子育て家庭に気軽に利用してもらえている。地域の子育て家庭はもちろんのこと、このような特徴的な利用があるのは、年間300日以上開所しているからでもある。さて、当センターでは、利用者同士が交流をしたり、親子のスキンシップを深めたり、さらに親の子育て力を高められるように、専門講師を招いた子育てに関する講座や、地域のボランティアによる親子ふれあい講座など各種多様な講座を開催している。一方、子育て家庭の自主的な利用を待つだけではなく、地域に出向いて、親子の交流の場の提供や子育て情報の提供、地域住民との交流の場の提供などを行っている。これは、子育て家庭が孤立しないように働きかけることで、子育て不安の軽減や虐待の未然防止を図るための取り組みであり、特に未就園児のいる家庭については、より積極的により慎重に対応していくことを心掛けている。また、本学園学生らの保育人材育成などの学びの場として活用するとともに、学生など若者たちが将来親になることを想像してもらえることを期待し、利用者親子との交流の機会を積極的に設けている。

幼児教育学科学生　体験学習

地区公民館出前講座

仁愛女子高等学校体験学習

【子育て講座】

本学園教員等による子育て講座(表1)を開催した。

本学園の公開講座として取り組むことで、子育て家庭にも広く周知され、地域に開かれた開催ができるメリットがある。また、講師として各教員を招くとともに、各教員に学ぶ学生らが日夜勉強してきたことを自らが親子に届ける実践的な学びにもなった。

◆「えいごであそぼう」

子どもが英語にふれる機会を求める利用者の意見も多く、今年度は2回開催した。<内容／うたあそび・絵カードを見てまねっこあそび・ペープサートの人形を見てあてっこゲーム・買い物ごっこ・雪だるま作り・ハンバーガー作り>。参加者は、遊びの中で英語への関心を高めたい、子どもはどんなやりとりが出来るのかなどを期待して参加したという。野本先生のはつらつとした指導に、軽快な英語遊びのリズムの楽しさを身体で感じ、親子はその魅力に引き込まれていた。参加者からは、子どもの英語への接点の参考になった、日常では英語にふれることがないため良い機会だった、英語遊びとして親子で作りものができたことが楽しかったなどの感想が寄せられた。野本先生に学ぶ学生も一緒に親子の遊びをリードしてくれたこともあって、子どもたちの英語への親しみやすさがより増したようだった。

表1. 地域活動実践センター　公開講座「子育て講座」開催実績　（会場 AOSSA）

日程（平成30年）	タイトル	講　師	親	子	組
5月26日(土)	えいごであそぼう	野本　尚美 氏	30	39	27
8月8日(水)	ベビーヨガ	飛石めぐみ 氏	22	22	22
10月10日(土)	離乳食の話と相談	木内　貴子 氏	18	20	18
11月17日(土)	えいごであそぼう	野本　尚美 氏	25	28	20
12月5日(水)	虹色コンサート	木下　由香 氏	59	59	56

子育て講座「えいごであそぼう」

◆「虹色コンサート」

親子のふれあい遊びや手作りコンサートを木下先生に学ぶ学生らが中心となって開催した。親子が家庭でもすぐに出来そうなふれあい遊びや簡単な手遊びなどが多く取り入れ、親子の時間が膨らむ内容であった。学生手づくりのアンパンマンの絵カードを使った遊びでは、曲に合わせて子どもたちが体を揺らして歌ったり飛び跳ねたりして、嬉しそうにリズムにのって遊んでいた。学生らの若々しく初々しくもある元気な笑顔と一生懸命なその姿勢に、親も子も笑顔で楽しそうに参加していた。さらに、トーンチャイムの演奏では、聴く機会がないので嬉しかった、素敵な音色が心地よくリラックスできたなど参加者からの感想が寄せられた。学生らは、この日のために練習を重ね発表出来たことを大変喜んでいたが、一方でその学生らの姿に、参加者は、今日からまた子育て頑張ろうと思えるエネルギーをもらえたと、我が子の顔をみて笑顔で話していた。

子育て講座「虹色コンサート」

【子育てサークル支援事業「はっぴぃすmama」】

本事業は、転勤等により福井で生活をしている子育て家庭が、グループ活動を通して、子育てや生活環境などについて知らない土地での暮らしであるが故の困りごとや気がかりさ、生活情報などを共有し、子育て不安の軽減や孤立の防止などを図ることを目的として3回シリーズで開催した。千葉や愛知、山口や北海道等の全国各地域から、転勤や結婚、夫の転職により移り住むことになった、7か月～1歳の子どもをもつ母親9名が集まった。福井に住んでからは、数ヵ月～3年程度とのこと。親戚や友達もいなくてママ友を作りたい、福井がわからないから親子で出かける情報が欲しいなど、知らない土地で孤立しそうな淋しさを何とかしたいという思いを持っての参加だった。各回テーマを変えてファシリテーターが話題提供を行い進めていった。特徴的な話題としては、夫の実家での離乳食作りの方法、帰省時の公共交通機関の各種サービスや利用方法、実家に持っていく手土産の選び方などがあがっていた。このように、メンバー同士で話題を展開し新たなテーマがみつかり、話し合いを深めていく中で、同じ不安や悩みをもっている人がいることを確認し合い、自分が抱えている不安や悩みを理解してもらえたという安心感が得られ、仲間意識が芽生えていった。この取り組みは、子育て家庭がつながりあうためのきっかけ作りであって、継続的な交流が持てることや新たなメンバーを紹介するなど橋渡しの支援を引き続き行っている。

「はっぴいす mama」情報交換

「はっぴいす mama」

【相談室】

相談室では、子ども相談、乳幼児期の子育てに関する電話相談を実施するとともに、以下の（表2）に掲げる項目について相談対応を行っている。相談方法は、来所面談、電話、家庭訪問など柔軟に対応し、福井市子ども福祉課をはじめとする各関係機関との連携した対応も欠かせない。

また、福井市要保護児童対策地域協議会（要対協）での役割を担っており、実務担当者会議へ年12回、個別ケース検討会議へ70回の参加をした。要対協対象児童の中でも、養育者の育児不安や心の不調などの気がかりな子育て家庭約60件について担当し、来所面談や家庭訪問、関係機関との連携を行うなどの対応を行った。

表2. 相談室利用実績（のべ件数）

単位（件）

	子ども相談	女性相談	子育て ママダイヤル	小児科相談	弁護士相談	合 計
平成30年度	1,832	921	197	69	27	3,046

【子ども虐待防止オレンジリボン運動】

「大好き。こどもの笑顔。みんなの笑顔。」をコンセプトに、福井市ならびに子育て支援団体や企業等と協力して啓発活動（表3）を行った。福井市ボランティアnet.にボランティアサポーター募集や啓発活動の開催の告知を投稿し、福井市社会福祉協議会からは、啓発活動の取材を受け社協機関誌の表紙に取り上げていただいた。このように、広く広報活動を行ったことで、地域の大学生や高校生、一般企業の社会人やNPO団体など多くの市民ボランティアサポーターの参加協力を得ることができた。

今年度は、11月の児童虐待防止啓発月間に例年開催している「福井市オレンジリボン運動こども笑店」を「子

表3. オレンジリボン運動（児童虐待防止啓発運動）の活動実績

項 目	日　程（平成30年）	会　　場
街頭啓発	7月22日（日）	ショッピングセンターアピタ福井店
	7月22日（日）	ショッピングシティBell
	9月17日（祝・月）	ショッピングセンターパリオCITY
	9月17日（祝・月）	ラブリーパートナーLpa
	11月1日（木）	福井駅前西口ひろば
こども笑店	11月23日（金・祝）・24日（土） FBC主催 第7回 子育て応援団 すこやかふくい2018	福井県産業会館 1号館・2号館

オレンジリボンすこやかふくい

パリオ CITY：NPO 団体・ボランティアサポーター

子育て応援団すこやかふくい 2018：ステージ啓発

子育て応援団すこやかふくい 2018 に出展

育て応援団すこやかふくい」にて出展開催した。すこやかふくいは、福井の子育てに積極的な企業や団体が結集する一大イベントとして子育て家庭には広く知られており、数千人規模での来場者がある。子育て家庭に向けた啓発をするには最適なイベント会場であると考えた。出展した内容は、①子ども虐待の現状を伝えるパネル展示、②子育て支援情報の設置、③啓発パンフレットの配付、④メインステージでの啓発、⑤子育て支援団体による話題提供、⑥親子で楽しむ遊びの提供。本学園学生、NPO子育て支援団体、地域の子育て家族サークル、大学生同好会、こども食堂、全国社会奉仕団体、オレンジリボン運動応援企業、さらには個人参加のボランティアサポーターや朝倉ゆめまるが一致団結して啓発に取り組んだ。

福井市&福井仁愛学園 子ども虐待防止

オレンジリボン運動 こども笑店 2018

【生活科学学科の学外授業】

今回、初めての取り組みとして、11～12月に3回シリーズで、子ども虐待未然防止を目的にした、子育ての不安を気軽に相談してもらえるダイヤル情報をどのように伝えると効果的なのかということを、本学園短大生活科学学科の学生16名に考えてもらうことにした。その過程として、第1回は、子育て家庭の現状や子ども虐待の実態を福井市児童虐待防止啓発出張講座にて学び、第2回は、こども笑店に参加し、来場者親子にゲーム感覚のアンケートをしたり子育ての情報を伝える啓発をしたりするなど、来場者とのコミュニケーションを図りながら実践的な学びを行った。第3回のまとめでは、子育て相談ダイヤル情報カードのプレゼン発表を行った。生活科学学科の学生にはなじみの薄いテーマであったかと思うが、子育て家庭という対象に情報を伝えることを共に考え、より効果的に伝えるための工夫やアイディアを提示してもらうことが出来た。

生活科学学科　演習授業（学外）

学生の社会的活動報告

森田地区活性化プロジェクト

生活デザイン専攻 2回生　髙島　璃奈

私たちは、卒業研究で森田地区活性化を目標に活動しました。森田地区はまちづくりが進み、将来2万人近くの人が住むことが予想されています。地区の北東部には北陸新幹線が通るようになり、より一層森田地区の魅力を向上することと、新旧住民の交流を促進することが課題となっています。

そこで私たちは、課題解決にむけて4つの取り組みにチャレンジしました。1つ目は16年前に作られた『森田音頭』を子供や若者向けにアレンジした『Neo MORITA Ondo』で新旧住民を繋ぐ企画。2つ目が「もりた夢駅」の企画の充実による公共交通機関への関心の向上。3つ目が駅の利便性と魅力の向上を図るための駅周辺整備構想の提案。そして、最後に動画による森田地区の情報発信を行いました。

取り組みを通じて、多くの方々に協力していただき、森田のまちづくりが次の展開につながるきっかけづくりに多少なりとも貢献できたと考えます。しかし目的を達成したとは言い難いです。複数の地域課題に取り組んだためテーマが深く、大きいため十分な検討に至らなかった部分もありました。

森田のまちづくりは卒業研究に留まるものではなくこの先も継続していくものであると考えます。今回の私たちの取り組みをきっかけに、来年以降後輩たちが引き継ぎ、住民の方と一緒に取り組むことを願っています。

駅周辺整備構想座談会の様子

坂井市まちづくり協議会 オリジナルキャラクターデザイン 2018

生活デザイン専攻 2回生　野木　彩乃

昨年度、先輩方が13のキャラクターをデザインした第2弾・3地区を私たちが担当しました。今回は磯部地区を私野木、三国木部地区を加畑来夢さんと山田光莉さん、春江西部地区を幅岸礼佳さんがチームリーダーとして活動しました。私自身今回のキャラクターを考えるプロジェクトに参加できてとても良い経験になりました。

地区の魅力をキャラクターとして引き出せるように、磯部地区の方との意見交換を何度も行い、最初のキーワード検索では磯部地区には特別な強みは無く、「表児の米」という一部地域の有名な祭がキーワードとして出たものの、地区全体のキャラクターとしてはどうなんだろうという意見を交わしました。苦労したキーワード提案の中で、磯部地区ならではの「いそべ音頭」「いそべっ子」といった魅力あるキーワードを発見。キャラクターとしてデザインするにあたり抽象的で難しいかなと感じていましたが、1回生の野坂亜鼓さんの表現豊かなデザイン原案がとても良かったです。自分がデザインを選ぶ側になるのは 新鮮でしたし、何点かに絞り込むのに大変悩みました。

最終的に音頭を踊る提灯のキャラクターに決定し、私がデータを作成。最終発表は、マスコミの前でとても緊張しましたが磯部地区のアイデアの説明や工夫した点を上手く伝えられたかと思います。プレゼンテーションが苦手な私がこれを機に少し克服できました。最後に、これからもこのキャラクターが磯部地区の活性化に繋がることを願っています。

1月30日に坂井市役所で行われた最終発表会で、
デザイン案をプレゼンテーション。

「SNS映え講座」で講師体験

生活情報専攻　澤崎ゼミ

新年度の卒業研究は4月からスタートですが、既にゼミ配属が決まっているので、一足お先に新ゼミ生たちで福井商工会議所主催の「福井の手土産発掘会＆会議弁当ご賞味会」に参加してきました。といっても、一般参加ではなく、ミニ講座の講師（司会・アシスタント）としてです。

今年で7回目となるこのイベント、今回はインスタグラムやFacebook、ツイッターなどのＳＮＳに写真を投稿して、商品の魅力を伝えよう！という企業ＰＲ企画があり、そのためのミニ講座を学生たちで実践することになりました。

確かに、ＳＮＳを上手に活用しているのは学生のような若い年代です。ということで、学生たちがメインで進行する気軽で楽しいミニ講座となりました。

会場は過去最多となる79社、600人以上のバイヤー（参加者）で賑わっていて、多くのマスコミが取材に来ています。私たちはそのＳＮＳ用商品撮影コーナーの入り口で「ＳＮＳ映えする写真撮影のポイント」というタイトルでミニ講座を担当させていただきました。参加者の方々からも質問などを多くいただき、アットホームな雰囲気で講座を進めることができました。ご参加いただいた皆様、貴重な機会を与えていただいた福井商工会議所の皆様、ありがとうございました。

福井から世界とつながるワークショップ

生活情報専攻　澤崎ゼミ チームＪ♥Girls

当ゼミでは５つのグループに分かれて活動をしていますが、その中の１つのグループが、イベント活動をとおしてマーケティングなどを学ぶと同時に、環境問題やフェアトレード、ネパール等の支援に関する研究を行ってきました。この５人のメンバーが、８月19日、26日の２日間「福井から世界とつながるワークショップ」と題して、鯖江市河和田で小学生の親子を対象にしたワークショップイベントを実施しました。

実は、このワークショップを企画した５人のメンバーのうち３人が、２月にネパールへ交流・支援活動に行っています。そこで経験したことや学んだことなどを楽しく知ってもらうために、クイズ形式での講義からスタートです。その後、福井の自然を知るということで、地元で採取した松ぼっくりや木の実などを利用してフォトフレームづくりを行いました。フォトフレームも地元河和田在住の木工職人の方に作成していただきました。ネパールから持ち帰った菩提樹の葉を利用した栞と風鈴づくりもおこない、エアコンなどに頼らない涼しさの演出としての風鈴などの工夫を紹介、風鈴の一部にも菩提樹の葉を利用しました。

私たちがこの環境教育のワークショップで伝えたかったことは、世界の空がつながっているように、自然環境にも国境がないこと。ヒマラヤ、ネパールの自然と福井の自然はつながっている。だからこそ、私たちの日々の生活の中で自然環境についてもっと考えて、大事にしていかなければならない。そういう思いがたくさんつまったワークショップでした。

栄養研究サークル活動報告

食物栄養専攻 2回生　五十嵐　萌恵

6月2日に県総合グリーンセンターで開催されたみどりと花の県民運動大会（フラワーグリーンフェア）で、栄養研究サークル伝統のパウンドケーキの販売を行いました。また、福井しあわせ元気国体では10月6日（福井県営陸上競技場）と7日（福井市スポーツ公園）に、ボランティアとしてパウンドケーキの配布を行いました。プレーンのパウンドケーキ以外にも、ほうれん草やかぼちゃなど野菜を使ったものも作り、野菜が苦手な方にも食べて頂けるように仕上げました。このサークルでの活動で、様々な貴重な経験ができました。特に、国体でのボランティアは50年ぶりに福井県で行われた大会ということで、学生のこの時期に地元開催の大きな大会に関わることができてとても嬉しかったです。選手の皆さんやスタッフの方々を中心に配布を行ったので、自分たちの作ったパウンドケーキが活力や疲れた体の回復に少しでも役に立っていたなら幸いに思います。

沢山のパウンドケーキを作るのはとても大変でしたが、販売を行っていると、「美味しかった」「また買いに来ます」というような言葉をかけてもらえて、やりがいを感じました。サークルのメンバーで協力して作り、その自分たちが作ったもので人を笑顔にできることの喜びを知りました。これからは栄養士として、食べる人を笑顔のできるような料理、楽しい食事の時間が提供出来るように努めたいと思います。

じんあいこどものくに

幼児教育学科

日時：平成30年10月27日（土）　9:30～15:30
会場：仁愛女子短期大学　E館・C館

今年も幼児教育学科は大学祭に「じんあいこどものくに」を開催しました。催しは「1A　シャボン玉とボールプール、1B　のっけのっけ・ごろごろバトンパス、1C　水族館・宝探し、2Aお祭り（的あて・輪投げ・ボールすくい・ボーリング）、2B　サバイバルゲーム（魚釣り・野菜引き）、2C　きょうりゅうランド」と決まり、1AはC館1階玄関、他はE館で行いました。

廊下や受付など共有部分の掲示や飾り付けは最小限に抑え、参加者が企画会場にたどり着くことをねらいに、シンプルな案内表示を心掛けました。そうすることで、学生がクラスの催しに集中できると考えたのです。具体的には、学生会通信に載せるために用意した、クラスごとのポスターを20枚程度カラーコピーして、会場に誘う案内板や会場付近の飾り付けに使用しました。

当日は、来場者駐車場が校舎東側に設けられたため、C館からスタートする人の流れができ、C館玄関1Aの催しがE館を主会場とする「こどものくに」のアンテナショップの役割を果たして、例年より多くの人を呼び込むことができました。子ども331名、おとな252名、計583名の来場者で、経年比較では、2015年の568名を上回る数であり、その点では大成功と言えましょう。

学生たちも実際に動く中で気付きを得、自ずと学ぶところが多かったように見受けられました。ただ、実行委員会の活動については、役割分担を決めても役割間の隙間を埋める努力が今少し必要であったと思います。たとえば、催しのポスターに含める情報等の規定を実行委員に詳しく説明し、その通り描いてほしかったにも関わらず、クラス内で決めるポスターの描き手にまでは伝わらずに、規定外の仕上がりが6クラス中3クラスにも及びました。スタンプラリーの台紙を作る係とスタンプを買う係を決めても、両者が相談しないとスタンプの大きさが台紙に合わなくなります。カードの紐を切る作業も、短すぎる紐が大量にできました。ゴミ袋をクラスに配っても、実行委員が袋の存在をクラス仲間に知らせずゴミ集めを徹底できない、それでは配らないのと同じです。

通信機器が発達しても、伝えようとする心が無ければ伝わりません。人間が人工知能AIに負けないとすれば、心と頭のきめ細やかさであり、一人ひとりが常に思考し判断し行動していきたいものです。次年度は更に充実した「じんあいこどものくに」が実施されることを願います。

（文責　前田敬子）

ハーモニーホールふくい　ふるさと子どもコンサート

すてきなおねえさんのたのしい童謡とわらべうた
～手遊びとともに～

日　時　平成31年1月29日（火）午前11時　開演

場　所　福井県立音楽堂ハーモニーホールふくい大ホール

出　演　仁愛女子短期大学幼児教育学科　60名

当日の参加者／福井県内の幼稚園・保育園・こども園　21園・11個人（乳幼児とその保護者の方）・646名。（インフルエンザによる減数は5園・4個人・186名）

●幼児教育学科1回生　垣内　梨紗子

子どもの前で歌うという経験がなかったので不安でしたが、たくさん練習したのであまり緊張せず楽しく歌うことができました。わらべ歌遊びの時には間近で子どもの様子を見ることができました。手遊びはしている子としていない子がいました。保育者が楽しそうにしているのを見て真似している子どももいました。知らないお姉さんがたくさんいて驚いた子もいたかもしれませんが、私はやってない子にも楽しんでもらおうと笑顔でやることを心がけました。

楽器体験ではハープを担当しました。見たことのない楽器に興味津々の姿、音が出て嬉しそうな姿、楽器が重くても頑張って持つ姿。様々な姿を見ることができました。

このコンサートを通して音楽は子どもに親しみがあるものだと分かりました。今後、歌やピアノについてももっと学びたいと思いました。

学生ボランティア活動報告

英語サークル
森田地区児童館における英語教室

生活科学学科　生活情報専攻　１回生　大門　友美

私たちは、2018年8月6、8、9、10日に英語サークルでの活動の一環として森田地区にある全5箇所の児童館で英語教室を開催しました。どのようにすれば小学生に英語を学ぶことの楽しさを教えられるのかを考えるとてもいい機会となりました。

児童館では、まず色を題材とした英語の絵本を読み、一緒に音読をすることによって英語に親しんでもらいました。

内容は先生と話し合いを重ね、今年のテーマは「マジック」に決まりました。子どもたちがケガをしないように安全で簡単なマジックを行うことにしました。紙やストローやペットボトルなど身の回りにあるものを使ってマジックはできないかと試行錯誤した結果、紙で作ったサイコロの数を増やすというマジックと、絡めた2本のストローを外すというマジック、ペットボトルの飲み口に10円玉を置き密閉しているところを紙で隠してペンを貫通させるマジック、何も入っていない透明のコップに紙をかざすと動物の消しゴムが出現するというマジックの計4種類のマジックを行うことにしました。児童館にいる子どもたちを4つのグループに分けて、これらのマジックを行いました。そして、全員でするマジックとして白色と自分で選んだ色の2種類の毛糸を使い、もともと手に持っていた白色の毛糸が一瞬で、自分が選んだ色の毛糸に変わるというマジックを行いました。白色以外の毛糸は、赤、青、緑、黄色、ピンクの5種類を用意し、この中から英語で自分の好きな色を答えてもらい渡しました。この時に使った2種類の毛糸は思い出として持って帰ってもらいました。英語教室では、みんな楽しそうにマジックを行っていました。

簡単なマジックとはいえ、友達の前で行うのは緊張したと思いますが、マジックが成功した時の子どもたちの笑顔は可愛くて、私たちもとても嬉しく感じました。児童館に行く前は、子どもたちが楽しんでくれるのか不安でしたし、英語をきちんと話してくれるのか不安でした。しかし、マジックを見た時の子どもたちの驚いた顔や、マジックを自分一人で行い成功した時の嬉しそうな顔を見るたびに不安は徐々になくなっていきました。英語を積極的に話してくれる子どもたちもたくさんいて嬉しかったです。

今回の活動は、私にとってとても良い経験となりました。

パソコンボランティアサークル

仁短パソコンボランティアサークル（以下、パソボラ）は、鯖江市社会福祉協議会鳥羽事業所「なかま」にて、2ヶ月に1回程度のペースで「障がい者のためのパソコン相談会」を主催する等の活動をしています。

●サークル長：小川日子（生活情報専攻２年）

２回生になってすぐ、田中先生に声をかけていただき、パソボラに参加しました。私は視覚障がい（弱視）の女性の方をサポートしました。障がいのある方と1対1で話すのは初めての経験で、すごく緊張しましたがとても気さくな方でたくさんお話をし、すぐに打ち解けることができました。関わっていく中で、目が見えなくてもできることはたくさんあることに気付かされました。

弱視の方が活動する幅を狭めないために、すべてを手伝うことはせず、必要な点のみ適切に支援することが大切だと学びました。

社会人になると様々な人と関わっていきますが、その前に障がいのある方を支援する経験をし、いろいろな視点を身につけることができました。はじめは私の住んでいる鯖江にて、このような活動をしていると知り興味を持ったため参加しましたが、パソボラで出会った人たちのお蔭で自分自身が成長することができ、本当にこのサークルに入って良かったと思います。

●会計担当：下村由依（生活情報専攻２年）

私はパソボラでPCスキルを人に教えることを初めて体験しました。障がいがある方のペースに合わせ、Excelの問題集をみながら問題を解いていきました。１つの問題をひとつひとつ手順にそって教えることにより、私も表計算の問題を再確認でき、自分自身の復習ができ、勉強になりました。

パソボラに参加し、気づいたことがあります。それは何でもかんでも手伝うのではなく、障がいのある方ができそうなことはそっと見守ることも大切だということです。私が障がいのある方のできることを奪ってしまった！と思う部分があり、手伝いすぎるのはダメだなと気づきました。気づいてからは障がいのある方のできることを増やすお手伝いをしようという心がけでボランティアに参加することができました。

折り紙サークル

幼児教育学科　2回生　中村　初音

私たち折り紙サークルは、昼休みに集まり楽しくおしゃべりしながら活動を行っています。主な活動としては、「季節の壁面づくり」です。病気と闘う子ども達に少しでも季節の移り変わりを感じてもらえるように季節に合わせた壁面を毎月製作し、病院へと送っています。折り紙サークルの名の通り、壁面には簡単な折り紙を取り入れ、壁面を通して日本の美しい四季に興味を持ってほしいという思いで活動に取り組んでいます。壁面というと、平面であることが多いですが、あえて雲を綿で表現したり立体の折り紙を使ったりすることで壁面に形を持たせ実物に近づけようと工夫しています。

また、活動時間以外にボランティアにも参加しています。夏休み期間には、森田公民館で地域の子ども達やお年寄りの方々に折り紙を教えるという活動を行いました。普段は「教わる」立場である私たちにとって、このボランティアは「教える」ことの大変さを実感し学ぶことの出来る良い機会となりました。

折り紙サークルの活動を通して「折り紙の知識」が身についたのはもちろんですが、それと同時に「団結力や協力する心」など多くの力が身についたように思います。サークルでの経験は楽しいことばかりですが、社会に出てから必要となる力が身につく素晴らしいサークルです。私自身、折り紙サークルで活動することが出来てよかったと思います。

管理栄養士国家試験対策リカレント講座

	開講日	教　科	講 師（敬称略）	参加人数
第1回	9月20日（木）	食べ物と健康-1（調理）	谷　　洋子	8
第2回	9月22日（土）	◇第1回　模擬試験	牧野みゆき	2
第3回	9月27日（木）	栄養教育論	牧野みゆき	8
第4回	10月 4日（木）	生化学	谷　　政八	9
第5回	10月11日（木）	食べ物と健康-2（食品）	小林　恭一	8
第6回	10月18日（木）	公衆栄養学	牧野みゆき	8
第7回	10月21日（日）	◇第2回　模擬試験	牧野みゆき	7
第8回	10月25日（木）	応用栄養学	牧野みゆき	10
第9回	11月 8日（木）	社会･環境と健康-1	出口　洋二	8
第10回	11月15日（木）	給食経営管理論	嵐川眞智子	10
第11回	11月24日（土）	◇第3回 模擬試験	牧野みゆき	6
第12回	11月29日（木）	社会･環境と健康-2	出口　洋二	7
第13回	12月 6日（木）	基礎栄養学	高木　康之	7
第14回	12月20日（木）	人体の機能と栄養（解剖生理学）	齋藤　正一	9
第15回	1 月17日（木）	人体の構造と疾患（病理）	齋藤　正一	7
第16回	1 月27日（日）	◇第4回 模擬試験	牧野みゆき	7
第17回	2 月 1日（木）	臨床栄養学（診断）	齋藤　正一	7
第18回	2 月 8日（木）	食べ物と健康-3（食品衛生）	小林　恭一	8

平成30年度　公開講座開催一覧

【 生活とデザインセミナー 】

テ ー マ	あなたの知らない和紙の世界。
講　　師	和紙ソムリエ・和紙キュレーター　杉原吉直 氏
開催日時	平成31年2月16日（土）　14:00～
会　　場	仁愛女子短期大学　B101教室
参加人数	68人

【 プレゼンテーションのコツを学ぼう！ ～まなびの種を発表・共有するプロジェクト～ 】

内　　容	プレゼンテーションのコツを学ぶとともに、実際に自分の学びを発表し、共有していく。
開催日時	平成30年7月21日（土）　14:00～16:00
講　　師	本学 生活科学学科 生活情報専攻　准教授　澤崎敏文
会　　場	仁愛女子短期大学　ラーニングコモンズ
参加人数	7人

【 Microsoft Excel 講座 】

内　　容	Excel 2016の基本的な操作方法を学習し、表やグラフなどを作成
開催日時	平成30年9月2日（日）　9:00～16:00
講　　師	本学 生活科学学科 生活情報専攻　准教授　平塚紘一郎
会　　場	仁愛女子短期大学　C108教室
参加人数	11人

【 Microsoft Word 講座 】

内　　容	Word 2016の基本的な操作方法を学習し、文書の入力、書式の設定、 図表の挿入方法等について学ぶ
開催日時	平成30年9月9日（日）　9:00～16:00
講　　師	本学 生活科学学科 生活情報専攻　准教授　平塚紘一郎
会　　場	仁愛女子短期大学　C108教室
参加人数	11人

【 新人保育者スキルアップ講座 】

内　　容	【実技講座】「子どもの見方・子どもとのかかわり方」　講師：本学 幼児教育学科　准教授　乙部貴幸 【分 科 会】「友人と語ろう」
開催日時	平成30年5月19日（土）　13:00～15:30
会　　場	仁愛女子短期大学　E208教室
参加対象	平成30年3月の幼児教育学科卒業生
参加人数	16人

【 保育者ワークショップ 】

第1回	テーマ・内容	保育のユニバーサルデザイン①　『情報共有のための観察と記録の視点』
	開催日時	平成30年9月22日（土）　10:00～12:00
	講　　師	本学 幼児教育学科　講師　中尾繁史
	会　　場	仁愛女子短期大学　E208教室
	参加人数	11人
第2回	テーマ・内容	保育のユニバーサルデザイン②　『外国籍の子どもや保護者は何に困っているのか』
	開催日時	平成30年11月3日（土）　10:00～12:00
	講　　師	本学 幼児教育学科　准教授　増田 翼
	会　　場	仁愛女子短期大学　F102教室
	参加人数	7人

【 幼教卒業生　OGのつどい 】

内　　容	幼児教育学科教員と卒業生での近況報告など
開催日時	平成30年10月27日（土）　13:30～15:00
会　　場	仁愛女子短期大学　C館2階　カフェテリア
参加対象	平成25年～平成27年3月の幼児教育学科卒業生
参加人数	13人

【 幼児教育公開講座 】

テ ー マ	生命のケハイ
開催日時	平成30年11月17日（土）　13:30～15:00
講　　師	絵本作家　田島征三 氏
会　　場	仁愛女子短期大学　B405教室
参加人数	60人

【 孫育て講座 】

テ ー マ	折り紙で遊ぼう！
開催日時	平成30年12月8日（土）　14:00～15:30
講　　師	本学 幼児教育学科　教授　松川恵子
会　　場	仁愛女子短期大学　F102教室
参加人数	3組（子ども2人・保護者4人）

【 恋する山川登美子講座 】

内　　容	小浜市出身の歌人、山川登美子は、与謝野晶子に妬まれる歌才の持ち主であった。登美子の恋の歌を中心にたどり、同じく『明星』で活躍した晶子の歌と比較して特徴を明らかにする。
開催日時	平成30年9月15日（土）　14:00～15:30
講　　師	本学 幼児教育学科　教授　前田敬子
会　　場	仁愛女子短期大学　E208教室
参加人数	2人

【 演歌で学ぶ 音楽のしくみ講座 】

内　　容	日本人の大好きな演歌を探る事で、様々な音楽がより身近になってくる。演歌を作るヒントも学べる。
開催日時	平成30年9月22日（土）　13:00～15:00
講　　師	本学 幼児教育学科　教授　大久保功治
会　　場	仁愛女子短期大学　E208教室
参加人数	4人

【 歌う金子みすゞ講座 】

内　　容	金子みすゞの作品は童謡である。「歌う」観点から、その創作を見直す。みすゞの作品はしばしば「優しさ」が特徴だと言われるが、詩の内容への感想や評価でなく、詩の構成に着目したい。
開催日時	平成30年10月6日（土）　14:00～15:30
講　　師	本学 幼児教育学科　教授　前田敬子
会　　場	仁愛女子短期大学　E208教室
参加人数	2人

AOSSA子ども家庭センター・子育て支援室開催【子育て講座】

第1回	講 座 名	えいごであそぼう
	開催日時	平成30年5月26日（土）　13:30～14:30
	講　　師	本学 生活科学学科 生活情報専攻　准教授　野本尚美
	会　　場	アオッサ5階　子育て支援室
	参加人数	27組（子ども39人・保護者30人）
第2回	講 座 名	ベビーヨガ　～心も体もリフレッシュ～
	開催日時	平成30年8月8日（水）　10:30～12:00
	講　　師	飛石めぐみ 氏
	会　　場	アオッサ6階　レクリエーションルームB
	参加人数	22組（子ども22人・保護者22人）
第3回	講 座 名	離乳食のはなしと相談あれこれ　～ていねい“だし”でごちそう離乳食～
	開催日時	平成30年10月10日（水）　10:30～12:00
	講　　師	本学 生活科学学科 食物栄養専攻　講師　木内貴子
	会　　場	アオッサ5階　子育て支援室
	参加人数	18組（子ども20人・保護者18人）
第4回	講 座 名	親子のための虹色コンサートとお楽しみ会
	開催日時	平成30年12月5日（水）　10:30～11:00
	講　　師	本学 幼児教育学科　准教授　木下由香
	会　　場	アオッサ6階　レクリエーションルームA
	参加人数	56組（子ども60人・保護者60人）

教員の地域活動一覧

生活科学学科

（専攻別・五十音順）

専門分野		氏　名	講演や講座のテーマ・内容など
生活デザイン専攻	都市計画 まちづくり	内山　秀樹	●東日本大震災に見る地域の力～遠野からの報告～ ●里山文化交流センターのより良い施設運営のために ●広域避難者支援の必要性と課題 ●無縁社会を考える ●これからのまちづくり～住民とNPO、協働～ ●先進事例からまちづくりのココロを学ぶ ●夢ある国高のまちづくり～これからどう取り組むべきか? ●人と地域をつなげる公民館を目指して ●地域を魅力的に・人を元気にする プロジェクトづくりのススメ ●やねだんから学ぶまちづくり8ヶ条 ●わが町の活性化計画をより魅力的にする ●やねだんから学ぶまちづくりの流儀
	グラフィックデザイン ビジュアルコミュニケーション	西畑　敏秀	●デザイン研修／基礎コース　デザイン基礎コースの講師 ●屋外広告物講習会（屋外広告業の経営者および従事者、管理者へのデザイン講習） ●福井県高校総合文化祭　美術・工芸部門（美術部高校生や美術関連教員に向けた講演会） ●高度技術者招聘事業（特別授業開講） ●ふくふくベジファースト応援事業「ベジファースト／ロゴ・ポスターデザイン」 ●ふくいサラダニンジンプロジェクト「新種ニンジンのネーミング企画・ロゴマークデザイン」
	デザイン	橋本　洋子	●NPO法人SDwaveでの活動（デザインで社会貢献を目指すNPO団体として鯖江市で活動） ●メガメガ・ウルウルのほめほめLINEスタンプ40種類をデザイン ●メガメガ・ウルウルのほめほめゴム印のデザイン ●メガメガ・ウルウルのLINEスタンプ40種類をデザイン ●鯖江市が新たに市の動物としたレッサーパンダシンボルデザインの使用マニュアル作成 ●とうふドーナツのパッケージにメガウルを使用したステッカーデザイン
	テキスタイルデザイン ファッションデザイン	前田　博子	●ファッションショーの実施 ●染め物ワークショップ ●ファッション小物制作ワークショップ ●企業連携テキスタイル商品企画 ●テキスタイルデザイン図案制作
生活情報専攻	コミュニケーション マーケティング経営	澤崎　敏文	●効果的なプレゼンテーション手法について ●企画立案、広報手段について ●地域におけるマーケティングのあり方について ●コミュニケーションのあり方 ●ソーシャルメディアとビジネスの活用 ●地域ビジネス、企業等におけるマネジメント ●キャリアデザイン、学びと学習環境等
	教育工学 学習科学	田中　洋一	●保育者のためのパソコン教室 ●eポートフォリオ活用の研修 ●幼稚園における視聴覚教育研修 ●アクティブ・ラーニングのための授業設計の研修
	英語教育 第二言語習得論	野本　尚美	●幼児向け英語教室 ●小学生向け英語教室 ●「洋楽で英語を学ぼう」
	情報教育	平塚紘一郎	●Microsoft Excel 講座 ●Microsoft Excel 基礎講座 ●Microsoft Excel 応用講座 ●iPhone活用講座 ●iPad基礎講座
食物栄養専攻	食品学 食品加工学 農産製造学 応用微生物学	小林　恭一	●発酵食品と微生物 ●奥越特産サトイモについて ●ふくいの加工食品あれこれ ●永く守り、受け継ぎたい伝統の福井野菜 ●加工食品の知識と視る目を養う ●ジャム作りの基礎 ●福井県農産物の加工技術・食品開発 ●福井ウメの機能成分解析と特長を活かした利用加工 ●県産食材の栄養・機能成分と加工 ●野菜の栄養・機能成分について ●食品添加物の話 ●食品加工の基本 ●6次産業化にのための普及活動のポイント ●6次化に取組む時に考えなければならないこと ●リカレント講座「食品学」「食品衛生学」
	公衆栄養学	牧野みゆき	●あなたの食卓から子どもの未来を考える ●食と健康－生活習慣病を防ぐ食生活－ ●食と健康－健康寿命を延ばす食事－ ●食と健康－生活習慣病予防で健康寿命を延ばそう－ ●食べることは生きること－食育のすすめ－ ●「日本人の食事摂取基準2015」を活用した児童福祉施設における栄養管理 ●リカレント講座「栄養教育論」「公衆栄養学」「応用栄養学」 ●働く女性の健康管理－食事の工夫－ ●女性の健康と食生活 ●健康は栄養管理から－低栄養のキケン－
	調理科学	森　　恵見	●親子で作るデコレーションケーキ ●食育講座（調理実習） ●親子クッキング ●離乳食教室

幼児教育学科

（五十音順）

専門分野	氏　名	講演や講座のテーマ・内容など
健康体力学 測定評価学	内田　　雄	●児童厚生指導員研修会「ゲーム･運動遊び」 ●保育者ワークショップ「昔遊びを楽しもう」 ●「小学校1.2.3年生が楽しめる室内遊び、昔遊び」
幼児教育・保育	江端　佳代	●子育てワンポイントアドバイス ●保育課程の編成と保育内容 ●保育課程の編成と指導計画
発達心理学 実験心理学	乙部　貴幸	●乳幼児の発達（脳と行動） ●自己制御のメカニズムと発達 ●行動と遺伝
仏教学 おもちゃ学	香月　　拓	●保育者ワークショップ　「いのち」のはたらき ●音楽文化講座「声明を聴く」 ●ふくい総合学「ふくいの浄土真宗」 ●保育者ワークショップ「身近な素材でおもちゃをつくろう」 ●新人保育者スキルアップ「新聞紙で遊ぼう」 ●「こどもの成長とおもちゃあそび」 ●メンタルケア･スペシャリスト養成講座「死生論I」 ●子育て講座「おもちゃで育む親子のふれあい」
音楽	河野　久寿	●文化に親しむ【音楽文化講座】第3回「コンピュータによる音楽の作り方」
音楽科教育 ピアノ教育 ピアノ演奏	木下　由香	●出張音楽堂 ●風と緑の楽都音楽祭 ●2017国際音楽祭 in 越前町 ●初夏の子どもコンサート「シンドバッドのぼうけん」 ●ポルタDe'ファツィオリ「ピアノふれあい体験」 ●親子のための虹色コンサート in 大野「手作り楽器ワークショップとミニコンサート」 ●聴いて、見て、動いて楽しむ!0歳からのクラシックコンサート ●親子のための虹色コンサート in AOSSA ●ピアノ公開講座 ●ふるさと子どもコンサート ●保育者ワークショップ「子どものための音楽遊び～ピアノと戯れよう～」 ●文化に親しむ「音楽文化講座　ハンガリーの音楽教育」 ●クラシックお届けコンサート
美術	重村　幹夫	●デッサン実技指導 ●油画実技指導 ●幼児造形教育実技指導
保育 児童家庭福祉	賞雅さや子	●公開保育「からだ育て―意欲と自信につながる生活･遊び」 ●「日本の保育･世界の保育」 ●児童厚生指導員研修「集団援助活動」 ●「ともに生きる保育」 ●「共に生きるために―関係発達の視点」 ●主任保育士研修「相談援助」 ●子育て支援員研修
児童発達支援 特別支援教育	中尾　繁史	●新人保育者スキルアップ講座「気になる子への支援教材の作り方」 ●保育者ワークショップ「情報共有のための観察と記録の視点」 ●永平寺町すこやか子育て講演事業「子どもの『あのね』を引き出す関わり方」
日本文学 国語科教育	前田　敬子	●山川登美子 ●金子みすゞ ●発見　百人一首の世界 ●平仮名パネルシアター ●書くこと、読むことの保幼小連携 ●保育者と言葉 ●絵本と童謡 ●絵本の世界 ●保育者ワークショップ　群読を楽しもう ●絵本の表現
保育学・教育学 保育・教育思想史 保育・教育方法学 保育者論	増田　　翼	●ふくい子ども学「こどもの育ち―遊びについて―」 ●新人保育者スキルアップ「保育に活かす音の遊び」 ●保育者ワークショップ「歌う楽しさの原点にあるものは?」 ●保育者ワークショップ「主体的に学ぶ」とは ●ふくい子ども学「躾が変われば子どもも変わる?」 ●福井県民間保育園連盟「保育の専門性について」 ●鯖江市民間保育園保育研修会「4歳児の育ちについて」 ●越前町保育士会研修会「新保育所保育指針について」 ●福井県特別支援教育センター研修講座「気がかりな子を包み込む集団づくり」
教育課程論 保育内容	松川　恵子	●就学を迎える子どもを支える～家庭での配慮･心がけ～ ●「子どもの育ち」･「親の育ち」を支える ●人とかかわる力を育む ●子どもの育ち―人とかかわる力について― ●質の高い保育を目指して ●幼児期における道徳性や規範意識の芽生えについて ●主任保育士の役割と責務 ●中堅（リーダー）職員としての役割･行動 ●子育て支援は「親育て」から　～“Nobody's Perfect”子どもを育てて親も育つ～

平成30年度　教員免許状更新講習

本学が、平成30年度（2018年度）に実施した教員免許状更新講習「全ての受講者が受講する領域（必修領域）」・「受講者が所有する免許状の種類、勤務する学校の種類又は教育職員としての経験に応じ、選択して受講する領域（選択必修領域）」・「受講者が任意に選択して受講する領域（選択領域）」の概要は次の通りです。

必修講習①	講習名	教育の最新事情
	認定番号	平30-35141-100018号
	講師	乙部　貴幸（本学 幼児教育学科 准教授） 賞雅さや子（本学 幼児教育学科 准教授） 増田　　翼（本学 幼児教育学科 准教授）
	講習の目標・ねらい	「国の教育政策や世界の教育の動向」「教員としての子ども観、教育観等についての省察」「子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見」「子どもの生活の変化を踏まえた課題」の4つの事項について、教員に求められる最新の知識・技能の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年7月29日（日）　9：00～16：10
	受講者数	323人

必修講習②	講習名	教育の最新事情
	認定番号	平30-35141-100019号
	講師	乙部　貴幸（本学 幼児教育学科 准教授） 賞雅さや子（本学 幼児教育学科 准教授） 増田　　翼（本学 幼児教育学科 准教授）
	講習の目標・ねらい	「国の教育政策や世界の教育の動向」「教員としての子ども観、教育観等についての省察」「子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見」「子どもの生活の変化を踏まえた課題」の4つの事項について、教員に求められる最新の知識・技能の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年8月6日（月）　9：00～16：10
	受講者数	217人

選択必修講習①	講習名	教育の情報化（幼稚園編）
	認定番号	平30-35141-300058号
	講師	田中　洋一（本学 生活科学学科 教授）
	講習の目標・ねらい	主体的・対話的に思考力・判断力・表現力を活かして、幼稚園での「教育の情報化」に関する最新の知識・技能を学び、下記2点の到達を目指す。 ①情報倫理や情報セキュリティを理解し、幼稚園の情報セキュリティ・ポリシー（方針）を設計できる。 ②最新のICT活用例を理解し、多様な園児に合わせた視聴覚教育を設計できる。 また、本講習ではアクティブ・ラーニングとして特徴的な3つの手法（シナリオを用いたPBL、ワールドカフェ、知識構成型ジグソー法）を体験し、園での研修等に活用できることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年7月22日（日）　9：00～16：10
	受講者数	41人

選択必修講習②	講 習 名	幼児期における英語教育
	認定番号	平30-35141-300059号
	講　　師	内藤　　徹（本学幼児教育学科 非常勤講師） 野本　尚美（本学 生活科学学科 准教授）
	講習の目標・ねらい	「外国語としての英語教育の理論」「幼児英語教育の実践演習」の2つの事項について、教員に求められる最新の知識・技能の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年8月23日（木）　9：00～16：10
	受講者数	126人

選択必修講習③	講 習 名	幼稚園教育要領改訂の動向及び法令改正及び国の審議会の状況等
	認定番号	平30-35141-300060号
	講　　師	松川　恵子（本学 幼児教育学科 教授） ゲストスピーカー：川崎　恵理（福井県教育庁義務教育課 幼児教育支援グループ指導主事）
	講習の目標・ねらい	「幼稚園教育要領等の改訂」「法令改正及び国の審議会の状況等」の2つの事項について、教員に求められる最新の知識・技能の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年8月26日（日）　9：00～16：10
	受講者数	160人

選択必修講習④	講 習 名	幼保小接続の現状と今後の課題
	認定番号	平30-35141-300061号
	講　　師	江端　佳代（本学 幼児教育学科 講師） ゲストスピーカー：青木　美恵（福井県教育庁義務教育課 幼児教育支援グループ指導主事） ゲストスピーカー：林　　幸恵（森田小学校教諭）
	講習の目標・ねらい	平成29年度に告示された「幼稚園教育要領」では、保幼小接続の必要性が、強化されている。本講座では、保幼小接続についての教員に求められる最新の知識の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年8月24日（金）　9：00～16：10
	受講者数	204人

選択講習①	講 習 名	幼児と言葉
	認定番号	平30-35141-500165号
	講　　師	前田　敬子（本学 幼児教育学科 教授）
	講習の目標・ねらい	物語や絵本を新たな角度から眺め、絵本とその対象年齢に関する理解や鑑賞力を深めたり、文字へのかかわりについて話し合ったりすることを通して、小学校への接続をふまえた、幼児教育段階の支援の在り方について理解を深め、保育をこれまで以上に工夫するようになる。 また、言葉に関する実践的な活動を通して、保育者自身が物語の楽しさに気付き、物語に親しみを抱きつつ自ら探究し、言葉を大切にして自ら表現を工夫するようになることを目標とする。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年8月31日（金）　9：00～16：10
	受講者数	124人

選択講習②		
	講 習 名	幼児造形の指導法
	認定番号	平30-35141-500166号
	講　　師	重村　幹夫（本学 幼児教育学科 教授）
	講習の目標・ねらい	乳幼児の発達段階を踏まえた、造形表現に関する知識や技能を修得する。特に、材料や身体行為、環境に触発された造形表現を実践的に学ぶ。 このような学習を通して、保育者に求められる幼児造形の実践的な指導能力の向上を目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年7月15日（日）　9：00～16：10
	受講者数	53人

選択講習③		
	講 習 名	色彩と造形
	認定番号	平30-35141-500167号
	講　　師	橋本　洋子（本学 生活科学学科 講師） 前田　博子（本学 生活科学学科 講師）
	講習の目標・ねらい	子どもの活動を色彩と造形表現の観点から、子どもの発達過程を踏まえた色彩知識と造形制作に至るまでの考え方を学習します。 色彩では、色が持つ機能性を学び、子供の色彩感覚や情緒に良い刺激を与え、発達や安定を促すヒントを、実際に色紙で色を選び組み合わせながら体験します。 造形表現では、布や資材の特性を生かしたキャラクターをつくります。モノの形を何かに見立てながら制作し「考えること」の大切さを体感します。 これらの学習を通して、保育者に求められる基礎的な色彩感覚や技能、造形感覚の向上を目指します。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年8月29日（水）　9：00～16：10
	受講者数	99人

選択講習④		
	講 習 名	子どもの音楽的感性を育む実践指導
	認定番号	平30-35141-500168号
	講　　師	河野　久寿（本学 幼児教育学科 准教授） 木下　由香（本学 幼児教育学科 准教授）
	講習の目標・ねらい	子どもたちの発達に応じた音楽表現活動の意義を理解し、自然な音楽活動を通して、伸びやかな音楽的感性を育成する実践的な指導について学ぶ。子どもたちの音楽的感性をより育むことを目的とした講習を、理論と実践の両面から行う。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日　　程	平成30年8月3日（金）　9：00～16：10
	受講者数	99人

選択講習⑤	講習名	子どもの運動と食育
	認定番号	平30-35141-500169号
	講師	内田　雄（本学 幼児教育学科 講師） 嵐川眞智子（本学 生活科学学科 講師）
	講習の目標・ねらい	子どもの健康を「運動」と「食育」の面から学ぶことを目的とする。 「運動」では、子どもの運動遊びと体力の発達について学ぶとともに、体力測定の効果的な活用方法を学ぶ。 「食育」では、幼児期の間食の意味や最近増えている食物アレルギーや偏食などへの対応など具体的な食育の方法を学ぶ。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年8月28日（火）　9：00～16：10
	受講者数	343人

選択講習⑥	講習名	発達障害・気がかりな子どもの理解と支援
	認定番号	平30-35141-500170号
	講師	乙部　貴幸（本学 幼児教育学科 准教授） 中尾　繁史（本学 幼児教育学科 講師）
	講習の目標・ねらい	発達障害に関する基本的知識を整理するとともに、発達の気がかりな子どもに対する多角的な視点を持つことを目的とする。加えて、そのような子どもたちに対する支援方法にはどのようなものがあるか、それらを実際に応用するためにはどのような視点が必要かについて理解することも目的とする。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年8月27日（月）　9：00～16：10
	受講者数	364人

選択講習⑦	講習名	仏教に見る子どもとの関わり
	認定番号	平30-35141-500171号
	講師	香月　拓（本学 幼児教育学科 准教授）
	講習の目標・ねらい	釈尊の生涯と言葉について学ぶ。さらにその学びを通して、これまでの子どもとの関わりについて振り返りながら自己省察をする。また、仏教行事のあり方や意味についても学んでいく。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年8月30日（木）　9：00～16：10
	受講者数	283人

選択講習⑧	講習名	保育におけるマネジメントとリーダーシップ
	認定番号	平30-35141-500172号
	講師	増田　翼（本学 幼児教育学科 准教授）
	講習の目標・ねらい	多様化・複雑化する保育現場の現状を踏まえたうえで、保育におけるマネジメントとリーダーシップの理論および意義・役割について理解することを目標とする。具体的には、講習を受講することで、①組織マネジメント、②他職種との協働・連携、③保育の質保証、④保育におけるリーダーシップ、などについて考察するための見方を獲得する。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成30年11月18日（日）　9：00～16：10
	受講者数	75人

仁愛女子短期大学
地域活動実践センター
〒910-0124 福井市天池町43-1-1
TEL.0776-56-1133　FAX.0776-56-2922
E-mail　jissen@jin-ai.ac.jp